



# 情報学広報



京都大学大学院情報学研究科

平成27年度



写真:生物圏情報学講座で行われている野外調査  
(左)北方林における環境と植物の調査(右)舞鶴湾における海棲生物の調査

## 目次

[巻頭言]	●	京都大学情報学研究科平成26年度公開講座報告書
就任のご挨拶	●	・教授 守倉 正博…………… 22
・研究科長 山本 章博…………… 1	●	第7回 アジア情報学セミナー(インドネシア)報告
[随想]	●	・教授 鹿島 久嗣…………… 24
若い人達とともに	●	アジア情報学セミナーの開催報告
・京都大学名誉教授 乾 敏郎…………… 3	●	・教授 石田 亨…………… 26
選択と集中	●	京都大学サマーデザインスクール2014の開催報告
・京都大学名誉教授 山本 裕…………… 5	●	・実行委員長 荒牧 英治…………… 28
15年の勤務を終えて	●	留学生受入拠点整備事業 報告
・京都大学名誉教授 高橋 達郎…………… 7	●	・グローバル30 ワーキング・グループ 山本 章博…………… 30
[紹介]	●	同窓会イベント「超交流会2014」の開催報告
所感	●	・京都大学大学院情報学研究科同窓会 会長
・教授 大手 信人…………… 8	●	延原 章平…………… 33
参考にならない私の経歴	●	[諸報]
・教授 神谷 之康…………… 10	●	招へい外国人学者等…………… 34
新任スタッフの抱負…………… 13	●	平成26年度受託研究…………… 35
[報告]	●	平成26年度共同研究…………… 37
第16回情報学シンポジウム	●	平成26年度科学研究費補助金…………… 40
「ビッグデータとヒューマンサイエンス」開催報告	●	平成26年度特別講演…………… 45
・教授 石井 信…………… 15	●	学位授与…………… 47
京都大学第9回ICTイノベーションの開催報告	●	入学状況・修了状況…………… 51
・実行委員長 河原 達也…………… 18	●	栄誉・表彰…………… 51
情報処理学会第77回全国大会の開催報告	●	人事異動…………… 54
・教授 黒橋 禎夫…………… 20	●	教員一覧…………… 55
	●	日誌…………… 58

## ◆巻頭言◆

## 就任のご挨拶

研究科長 山本章博

このたび研究科長を仰せつかりました。全く想定外のこと、心の準備も整わない状態のままで、その任に着かせていただいております。昨年度は、前任の佐藤亨先生が迅速かつ的確にお仕事をされる様子を間近で拝見しておりました。それに遠く及ばない私の力でこの大役を務めるのは甚だ心もとないのですが、精一杯務めさせていただきます。本稿では、私の経歴と研究分野という視点から、私見を述べさせていただき、皆様方からのご批判を受けたく存じます。

本理学部を卒業後、長い間本学を離れておりましたが、ご縁があって平成15年秋に「今出川通を南に越えて」本学に戻るようになりました。理学部の講究では数理論理に基づく計算機プログラムの正当性を学び、さらに修士課程でも数理論理をベースにした研究を行っていましたが、博士後期課程半ばから研究対象を機械学習へとシフトし、現在に至っております。このような経歴のため、現在の研究対象である機械学習・データマイニングにおきましても、数理論理や計算理論を陽に陰に用いております。学習と言語・論理の境界に立っているわけですが、本人としましては、学習するパラメータが数値から論理式や形式文法に置き換わっただけ、と極自然に捉えております。

教員として本学に在籍したことがなく、また、研究科創設期を知らないため、本研究科内外で起こる事象についてそれらの由緒を学ばせていただきながら過ごしてまいりました。どのような規程・規則類にも明示されない背景知識と意図された解釈があり、それを知らなければ事象への適用が困難であること、および、個々の事象への規程・規則類の適用プロセスは極端に圧縮された形で記録されていることを帰納的に知ることになり

ました。ただしこれは組織の一構成員としての視点からの印象ですので、今後はさらに新たな発見があると予想しております。

外から来ますと、本研究科の研究室構成は「少し手を広げれば直ぐにいくつかの近隣の研究室に触れることができる」ほど密なものになっていると感じます。一方で、情報学はその学際性から、多くの関連分野や領域を持つことになり、他分野との連携の中で独創的な研究が生まれてくることが多いことはご了解いただけたと思います。したがって本研究科を遠目から見ますと、広範な関連分野との疎なリンクの中央に、稠密なリンクの集積体として本研究科が存在しているように映ります。リンク全体の構造は時々刻々変わり得ますので、その中で本研究科の位置は、各教員の皆様の独自性に基づく研究活動によって、適切に移動すべきものであると考えています。ただし、全くの「自然に任せて」の構造変化ではなく、人事によって将来を見据えて変化の始点と初速を与えることが肝要と考えています。

さて、研究科が直面する一つの課題は学域・学系制度への対応です。教員人事を学系という新たな単位で行う、という制度です。研究科も現在の学部と同様に、教員が職務を兼任する組織となります。さらに複数の学系を集めた組織として学域が置かれます。学系については、昨年度末以来、学内で情報学に関する部局である学術情報メディアセンターと同一学系を構成する案について検討を開始しています。そこでは、情報学という学問領域を担う組織の将来の在り方を考慮しながら、教育・研究を展開する道筋をつけた上で、上述の人事を実装できる形にする必要があります。

研究科にとってもう一つの直近の課題は、今春

---

「国立大学法人運営費交付金の在り方に関する検討会」が公表した大学の運営費交付金についての中間まとめから生じています。その骨子には、各国立大学は重点支援の3つの枠組のいずれかを選択し、それに基づいた取組構想を提案する、とあります。3つの枠組の中で、本学・本研究科に最も一致するのは「卓越した成果を創出している海外大学と伍し、世界で卓越した教育・研究を推進する」であることは間違いないと考えられます。本研究科の皆様は当然と受け取られるとも思います。しかし、この中間まとめにおいて「各大学の取組構想には、測定可能なパラメータを設定し、その向上度を予算に反映する」とも記されています。研究活動には様々なパラメータが考えられますが、教育活動に対するパラメータで「世界で卓越した教育」であることを示すために有効なものはいくつか、大学院生を対象とする研究科の教育の在り方から議論する必要があると考えています。

そもそも、1人の博士を排出するために5年が必要であり、学部学生が進学することを考え併せれば9年かかります。中期目標・中期計画期間は6年間、またこれまで研究科内で実施されてきた教育プロジェクトは長くても7年間です。プロジェクトを実行する側にとってみると、実施期間内

で評価されますので、教育プロジェクトとしては短すぎると感じます。短い期間に測定可能なパラメータを用いて評価を受けることへの疑義は勿論ですが、この測定可能性に計算可能性や外挿可能性を組合せて将来を描くということも一つの方策であると考えます。

教育プロジェクトにはこのような弊害もありますが、プロジェクトを実践後の資産は残ります。例えば、G30については、外国人特定教員のための再配置定員が獲得できたことは本研究科にとって大きな資産となりました。その結果、国際コースは継続することができ、学内措置の予算もプロジェクトの趣旨は変更されつつも継続できてきました。リーディング大学院につきましても、各プログラムで教育カリキュラムを確立いただきましたし、デザイン学大学院連携プログラムにおきましては、コンソシアムを設立いただいています。上述のパラメータ評価だけではなく、研究科の学生と教員にとってこの資産を有用な形に展開してゆくかを検討する必要があります。

目前の検討事項ばかり述べてまいりましたが。皆様と、本研究科のあるべき教育・研究活動環境の構築に向けて日々取り組ませていただく所存ですので、何卒お力添えをお願いいたします。

## ◆ 随 想 ◆

## 若い人達とともに

京都大学名誉教授・京都大学特任教授  
追手門学院大学教授 乾 敏 郎



ふるさとは遠きにありて思うもの。助手の時期を入れると、実に27年も京大にお世話になった。今春より、私立大学に勤務しているが、今更ながらこれまですばらしい環境で仕事を

をさせていただいたことに感謝する日々である。

これまでとは異なる点はいろいろある。まず私学は教育熱心で、学生に対してそこまでやるかと言いたくなるくらい手とり足取りである。ゴールデンウィークもなく授業である。学生は幸せなのだが、たぶん有り難さはわからないだろう。また私学は物理的に恵まれた環境で仕事ができるのだが、教員は教育に多くの時間をとられて研究をする時間はきわめて少ない（はずである）。

また京大在職中は、ほとんどが大学院生を相手にした教育であった。今は一部の授業を除き、ほとんどが学部学生相手の仕事である。1回生は、ついこの間まで高校生だった人たちだから、子ども相手の授業と言っても過言ではない。その人達に難しい学問の一端を教えるのだから、さてどんなやり方がいいのだろうと常に考えてしまう。さらに大変なのは、学生の関心の高い授業には一学年の定員を超える数の学生が聞きに来ることである。月曜日の午前はあまり学生は来ないだろうと高を括っていたのだが、ふたを開けてみると、認知・脳科学入門（月曜1限）は250名、感覚心理学（月曜2限）は350名という有様である。

最終講義で紹介した天才 Helmholtz に関する Max Planck の回想がある（ヘルマン、1977）。

「ヘルムホルツはきちんと準備せずにやってきて、いつもつまりながらしゃべり、小さなメモ帳に書いてあるデータを探したり、絶えず黒板で計

算したりで、彼自身もわれわれと同じようにこの講義に退屈しているのだ、と思わざるを得ませんでした。その結果、聴講者はつぎつぎに出てゆき、終いには私とのちの天文学者ルドルフ・レーマン＝フィレスという友人の二人だけになってしまいました。」

古き良き時代では通用したと思うが、これでは学生達からクレームが出ること必至である。

多くの人々が、科学的なものの考え方や論理的思考の仕方など、少しでも身につけてくれればと思う。私が一番気をつけていることは、直感的にわかってもらうことである。細かなことはどうでもよい。細かなことは、本当にその道に進む人だけでよいのである。そう言えば物理学者の久保亮五先生が次のようなことを書いておられた（久保、1961）。

物理の問題を考えるときには、何よりも大切なことは、それを物理の問題としてつかむことである。数学的な計算は面倒なこともあるし、また技巧を要することもある。それらの訓練も決して等閑視してはならないが、数学に目がくらんで物理の問題が何であったか忘れるようではこまる。数値的な計算をして、2桁も3桁もちがった答を出して平気でいたり、数式的な計算でディメンションがちがっているのに気がつかない、といった答案にお目にかかることはしばしばである。長岡半太郎先生は、黒板で計算したあげく、むしろプラスだ、といって最後の答の符号を変えられたということであるが、計算は誰でもよく間違えるものである。しかし、むしろ、といて答を直す物理的なセンスが大切である。計算して出た答は、定性的には多くの場

---

合、計算せずとも理解できるものである。

また難しいことを聞いても左から右に忘れてもらってはやり甲斐がない。そのためには面白い、目から鱗といった感情に訴え、海馬による記憶の固定化を促進する以外ないのである。今日(5月4日)も朝から大勢の学生が大教室に集まっている。責任重大である。

一方、大学院の授業(社会認知神経科学)も最初は2人だったが、何か噂を聞きつけて少しずつ増えてきた。大学院の授業は、教授室の絨毯に座って学生の知りたいことを話してあげている。

5月下旬には、学部ゼミの紹介と希望調査も始まる。今年は希望者をHelmholtzグループとDamasioグループ(Damasioは認知神経科学者)に分け、それぞれ推論問題と感情生成・認知の問題に分かれて勉強を進めてもらう予定である。どんな学生が来るのか楽しみだ。

#### 引用文献

ヘルマン, A. (1977) 生井沢・林(訳) プランクの生涯, 東京図書株式会社.

久保 亮五(編)(1961) 大学演習 熱学・統計学, 株式会社裳華房.

## ◆ 随 想 ◆

## 選択と集中

京都大学名誉教授 山 本 裕



ブルーノートというジャズの名レーベルがある。ジャズといえばブルーノートというぐらい、その存在感は大きかった。マイルズ・デイヴィス、セロニアス・モンク、ハービー・ハンコック、ジョン・コルトレンなど錚々たるジャズの巨星たちがここから育っていった。

しかし、この名門も近年は振るわず、キャピトル・レコードの傘下に入って、しかもグッズの売上中心に、新しいレコードの発売はなしという、早い話が整理ポスト入りという憂き目に遭いそうだったのである。ちょうどその時、ふとしたきっかけとタイミングで、ドン・ウォズというベーシストで、かつよく知られた敏腕プロデューサー（ボブ・ディランやローリング・ストーンズなどを手がけた）が社長を引き受けることになった<sup>1)</sup>。本人はレコード会社というものに対して不信感を抱いていて、社長になることなぞ全く興味がなかったらしいが、「ブルーノートなら話は別だ。どうして断れよう。子供の頃からのファンだったんだから。」ということでききなり社長になることになった。2012年のことである。

自身ミュージシャンで、その方面での幅広い人脈もあり、というわけだったのだが。彼のプロデュースの哲学が興味深い。「最も大事なものは、常にファンであることだ」という。「アーティストが本物かどうかだけが大切だ。ジャンルも人種も関係ない」とも言っている。経営というと、コストとか金融とかそういう話になりがちで、要するにアートがビジネスになって

しまうのが問題だと彼は言っているのだ。自身もミュージシャンであることの強み、とらわれないリベラルな考え方を最大限に活かして、ミュージシャンたちと信頼関係を築き、瞬く間にブルー・ノートをトップレーベルに再度押し上げることに成功したらしい。

選択と集中とか言ってみても、それを誰がどう行うかが生命線であることがよく分かる。実際大手レコード会社では「金融屋や銀行屋はわかっちゃいないんだ」という状態だったのだから。

もう一つ、これは筆者の経験から。

ここ15 - 20年ほど、つまりバブル崩壊以降、企業の求人形態が大幅に様変わりした。京大のブランドがそのままで通用することはなくなり、わずか30分の面接で不採用の烙印を押される学生も珍しくなくなってきた。しかし中には、京大生だからそれなりのポテンシャルはかならずあるはずだといって、少々弱点には目をつぶって採用してくださるありがたい会社もある。いろいろな会社に採用された嘗ての学生たちのその後を折にふれて見るにつけ、採用時の人事担当者の判断に首を傾げざるを得ない気持ちが増えてきた。例えば面接下手で、4回も5回も落とされた学生が、就職して5年たった今のびのびと実力を発揮して、立派な戦力に成長していたりする。在学中はちょっとどうかと思っていた人が、「就職してから生まれ変わりました」という場合もある。概して減点法の面接で重箱の隅をつつくような採点をしているところは、あまり結果がよろしくないように思う。これなど、人間の浅知恵を如実に見せられているようなものではないだろうか。

選択と集中と言っても、未来を見通せるものなど誰もいないのである。そういうところで無理矢理に選択を強いてみても、複雑化した現代社会で

は人間の薄っぺらな判断など脆いものだと思わざるをえない。人がどこで実力を発揮するか、適材適所など言うはやさしいが、適所を人知で見つけるのは容易でないという反省も必要であろう。我々の教育においても、安易に秀才とそうでない人とを分別したり、まして高校終了時の瞬間最大風速のような入試の点数を以って人を選別するのは愚かなことだと思うのだが。心せねばならないことと思う。

さらにもう一つ例を上げたい。研究とか開発とかで、個人のレベルで何をどう研究するかという選択は当然働くであろう。しかし「選択と集中」という言葉が使われるとき、多くはもっと大きなスケールでのそれを指すのが普通である。例えば選択をしてある特定の研究所にどんどん予算をつけ、研究テーマを絞り込んで、その後それに相応しい成果を挙げよ、となったらどうなるか。実際に理研の研究者には、ことに有期雇用の研究者には、そのような圧力がかなり大きいのしかかっているらしいとも聞く。先ごろ起こった不幸な不正事件はこのようなマネージメントの姿勢と無縁であったとはいえないであろう。

簡単に図式化してみよう。

「これからはバイオが発展していく」

「日本でこれの研究は〇〇が中心である」

「集中して予算を措置し、〇〇を優遇して研究者が研究に専念できるようにしよう」

「優遇したからにはそれに相応しい成果を」

となるとはなはだ危ない。何やら高値に上がりきった株式をさらに買って、さらに高値になるはずだという甘い期待を連想させる。

こういうことをやっていると、いつか我々自身の浅知恵に反撃を食うのではあるまいか。アカデミアの根本的価値は、未来が不透明でわからないからこそ、厚みのある研究を行い、一見不要不急

と見えようとも、想定外の変化にも、あるいは5千年、1万年のスケールにも対応できるような知と智慧を積み重ねていくことにあったのではあるまいか。次にこれが流行りそうだと予測したいというのは、人間の性でやむを得ないこととはいえ、安易に未来が予測できるなどという思い上がりは、我々自身が自分で代償を払わねばならないようになるのではないかと懸念する。

監督官庁の好きなノーベル賞に話題を限ってみても、当初想定通りのシナリオに沿って結果が出たという例は稀であろう。(でなければ研究でなく、仕事である。)であるからこそ、予想を裏切るような結果が出るからこそ、ノーベル賞に至るような発見があったと思うべきである。ノーベル賞に特化したい国は数多あると思うが、そういうところで選択と集中は期待通りに機能していないのではないか。どうした訳か考えるのも無駄ではあるまい。

だとすると、ドン・ウォズのプロデュース哲学をもう一度振り返ってみるのも良いのではないか。「まずファンであることが最も大切なのだ」と。日本の学術行政を担う方々は、学問と科学のファンなのだろうか。ドン・ウォズのように自らプレイヤーとして活躍出来るだけの能力と知見(例えば最低ラインとしての博士号)を身につけてことに及んでいるのだろうか。

日本の学術行政が、ブルーノートの整理ポスト入りを促進するような方向に、現場を知らない金融屋とドンに揶揄されるような方向に進んでほしくないと思っている今日このごろである。

## 注

1) 「ブルーノートの逆襲」(Wowow,2015年5月9日放送。以下同。)

## ◆ 随 想 ◆

## 15年の勤務を終えて

京都大学名誉教授 高橋 達郎



2000年7月からの約15年の勤務を終えて退職しました。今から振り返るとあっという間の出来事のような気がします。その間学内・学外の大勢の皆様にお世話になりました。改めて御礼を申し上げます。研究室では毎年大勢の配属学生を迎え、わいわい・がやがやと卒業研究や修士論文研究に熱心に取り組んでもらったことも楽しい思い出です。

工学分野では、技術が利用される産業界の動向が、研究や教育に大きな影響を与えます。新技術によって、新たなサービスや機器が開発され産業全体が成長すれば、その技術分野の重要性は増します。また成長産業には就職先としての人気が上がります。また成長産業には就職先としての人気が上がります。また成長産業には就職先としての人気が上がります。また成長産業には就職先としての人気が上がります。

私が担当した通信ネットワーク分野は、これまでは技術開発を原動力として成長を続けてきました。光伝送技術やiモードなど、日本の通信会社や通信機メーカーは、通信技術の発展に多大な貢献をしてきました。通信事業は設備産業の色彩が強く、設備の経済化や効率化のために、通信事業者も積極的に研究開発を進めてきました。

しかし、1980年代半ば以降の通信事業への競争政策の導入を契機に大きな変化が起きています。米国では1984年にAT&Tが分割され、1985年には日本でもNTTが民営化されました。ヨーロッパの固定電話事業への競争導入は遅れましたが、携帯電話を含めて考えると大きな差はありません。独占事業の時代には安定した経営のもと、通信事業の売り上げの3%を研究開発につぎ

込んで長期的な研究開発が行われました。北米・日本・欧州の3つの先進国地域ではリージョナルスタンダードを設定し、それぞれの地域内で用いる通信システムが、地域内の通信事業者と通信機メーカーの共同作業で開発されました。通信機メーカーは地域内の通信事業者にシステムを納入することで、経営が成り立っていたわけです。

ところが、通信事業の競争激化とともに、様相が徐々に変化します。通信システムのソフトウェア開発費が高騰する中で、通信事業者は専用のシステムを開発する経営余力がなくなってきました。世界中で数種類の通信システムを開発するよりは、1または2種類の通信システムをみんなで使ったほうが経済的になります。グローバル標準の制定とあいまって、日本の通信機メーカーはグローバル競争の中で活躍する場を失ってきました。また、いったんはiモードサービスでリードした携帯電話も、スマートフォンの時代は、アメリカと韓国の後塵を拝しています。

このような通信産業の動向を踏まえると、日本の大学における通信の研究・教育に関してさまざまな考え方がありえます。第一点は、通信産業は相変わらず規模が大きいと予想されます。企業は即戦力の人材を求める傾向が強まりますので、教育の重要性は変わらないと考えられます。二点目は研究です。日本のメーカーや通信事業者の研究開発縮小の流れの中で、大学への期待が高まるのが自然です。通信技術は、人間の知恵の集積で形作られており、希少な材料や膨大なエネルギーを必要としていません。新たな世代の技術が大学から生まれることを楽しみにしたいと思います。



## 所感

社会情報学専攻 生物圏情報学分野 大手 信人



2014年11月1日付で、社会情報学専攻生物圏情報学講座に着任いたしました。1987年本学農学部林学科を卒業、1989年本学大学院農学研究科修士課程を修了しました。1991年農

学部林学科助手を拝命し、2006年9月まで農学研究科で勤務いたしました。2006年10月から東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻に勤務し、8年ぶりに京都に戻って参りました。

戻ってきたといっても、もといた北部キャンパスではなく、吉田キャンパスに移り住んだということについての気持ちの上での変化は非常に大きいというのが、この「所感」でかかせていただくことの主旨です。現在感じている研究科の雰囲気は「アウェー」。いっそ清々しいほどのアウェー感です。しかしながら・・・

学生のころから見続けている研究対象は森林生態系の構造と機能です。大学院生時代の研究テーマは、森林の土壌中における水の移動についての物理的な特徴を、実験データとモデルで記述することでした。フィールドと大学の実験室を行ったり来たりしてデータを取り、数値モデルで現象をシミュレートするという行っていました。自分自身もっともテンションの上がる局面は、なにか自然の仕組みが腑に落ちるデータが採れた瞬間でした。現象のモデル化の必要性や意義については、その頃の指導教官や先輩方から教示いただいたのだと思うのですが、そのことをじっくり味わえるほどの経験値がなかったと、今にして思います。とにかくモデルは作ってみるのだ、パラメータを最適化するのだとやっていました。

そもそも自然現象をモデル化するときのモチベーションはいくつかあって、実験や観測で得られた情報の中にある「動態」の仕組みを理解したいということや、将来こんな現象が起きるとか、状態が変化するか予測したいということがあります。前者は基礎研究的で後者は応用研究につながるモチベーションといえますが、研究者の指向や立場によって、重きをおく動機は異なってくるものでしょう。私自身は、前者の方にはまだ「情報不足」の状態である分、謎解きをしなければならない（謎解きができる）という期待感があり、そちらのほうにより魅力を感じてこれまでやってきたと思っています。

生態学が、生き物の動きや暮らし方を研究する学問分野であることは大抵の方が思い浮かべることかと思いますが、別な側面として、個々の生物を追うのではなく、生態系というシステムがどう動いているのかという問題に取り組む生態学もあります。生態系生態学 (Ecosystem ecology) と呼ばれますが、私自身は上に述べましたように、森林生態系内での水の移動と貯留という物理的なプロセスを記述するという入り口からこの分野の研究に入り、様々な物質の流れや形態の変化を追うことで系としての動態を明らかにするという研究をしてきました。

2003年に京大財団の援助をいただいて、カリフォルニアのUSGS (合衆国地質調査所) にある水資源部門で、しばらく共同研究をさせていただきました。海洋でも陸域でも窒素循環の実態解明のために、水に溶けていて生物の可給性が高い硝酸イオン ( $\text{NO}_3^-$ ) の挙動をトレースすることは重要なのですが、 $\text{NO}_3^-$  を構成するNとOの安定同位体比には、その $\text{NO}_3^-$  が生成される前にどんな窒素化合物だったかという起源情報と、どんな生

成・消費の反応を経たかについての経路情報が記録されます。当時、このNとOの安定同位体比を測定する画期的な方法がプリンストン大学の研究者によって開発され、メソッドペーパーが出た直後でした。USGSではいち早くこの方法で分析ができるラボシステムを立ち上げ、ルーティン化する段階に入っていました。そのときに、これはやるしかないと思い、森林生態系における窒素循環過程の調査への適用を提案して共同研究を持ちかけました。1年後に帰国してから、京大の生態学研究センターで始まったばかりのCRESTのプロジェクトで、この手法を利用して森林から沿岸海洋までの流域生態系の窒素動態を明らかにする仕事をすることができました。

こうしたフィールドとラボでのデータを積み重ねて生態系の仕組みを解き明かすという地道なことをやりながら、あるときから日本で長期的に生態学的な調査・研究を進めているフィールドサイトをつなぐネットワークをつくる活動に関わるようになりました。JaLTER（日本長期生態学研究ネットワーク）というこの組織を立ち上げるときに、自前のデータベースを持つことを意識的に企画しました。これは、ネットワークをつくるベネフィットは情報の共有にあるという極めてベタな論理からきた考え方でしたが、私自身、1990年代の終わり頃に、森林からの溪流への無機態の炭素流出に関することを、世界の森林の事例を集めてメタ解析をした経験があったからでした。当時、そうした研究データなど、ネット上にそうそう公開されている時代ではありませんでしたから、図書館で借りた論文や本をコピーし、そこからデータを抽出してエクセルで表をつくる、という古来行われてきた方法で自分だけのデータベースを作りました(単なる表ですが)。し

かし、当時アメリカ人の研究仲間から個人的に譲ってもらったUS EPA（合衆国環境保全局）の1980年代のプロジェクトデータ群は、すでに極めて組織化されたプロトコルでデータベース化されていました。

自分が調べて得た結論に、どれほどの普遍性があるのか、どれほど独自性があるのか、それを調べるためにこうしたメタ解析的な研究は不可欠ですが、現状日本でも「生態系」に関する情報は断片的で、時空間的な分布に偏りが大きいことは否めません。これは、調査自体がなされていないとか、その分布が偏っているという面もないではありませんが、「情報が表に出ていない」という側面もそこそこ大きな障害となっているのが本当のところだと考えています。

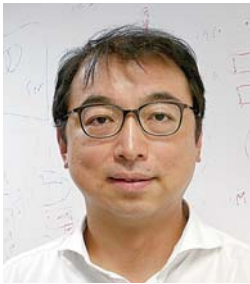
近年、Open dataを進めよう、というかけ声が、私たちの分野でも叫ばれるようになり、「採ったデータは公開する」という動きが急速に広まっています。私たちも、JaLTERデータベースを充実させていく、というか、生態系のモニタリングを、なんとかもう少しコーディネートしながら進めていくための情報技術を含めたインフラを整備していく必要性を感じています。

そのために、私はこの研究科にいこうと思ったという言い方は、嘘ではありません。アウェーは承知の上ですし、そもそも敵ではありません。どうかこのような考えをもった教員が社会情報学専攻には居るのだということをご認識いただいで、もしcollaborateできる機会や文脈がありましたら、話を聞いていただければ幸いに存じます。とことん勉強させていただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

ご参考までに、JaLTER: <http://www.jalter.org/>

## 参考にならない私の経歴

知能情報学専攻 生体・認知情報学講座 教授 神谷之康



学生時代の同級生に本をたくさん持っている友人がいて、よく本を借りて読んだ。本文を読んだ形跡はあまりないのだが、本の後ろにある著者の経歴欄には必ずマーカーで線が

引かれていたのを覚えている。その友人のその後の消息は知らない。著者（≒著名人？）の経歴に関する情報はキャリア形成に役立ったのだろうか？

今思えば、私にとってそのような情報はほとんど参考にならなかった。「XXXX年に小学校に入学した子どもの半数以上は、大学卒業時に今は存在しない職業に就くだろう」とか「20年後、今ある職業の半分はなくなる」と言われるが、私の現在の研究分野も、20年前私が研究を始めた頃には存在しなかったし、大学に「特任助教」なんて職業も存在しなかった。

と学生さんの今後のキャリアの参考にならないことを断った上で、自己紹介を兼ねて、これまでの経歴について少し紹介したい。

1970年、奈良県桜井市に生まれた。父は銀行員で、母は結婚まで同じ銀行で働いていた。母は、物理学者になりたいから大学に行かせてほしいと親に頼んだそうだが、「奈良女子大の家政学部以外はダメ」と言われ、泣く泣く地元の銀行に就職した。高校では、京大数学科を出たばかりで心理学者になる前の河合隼雄先生に数学を教わっていたそうだ。数学の成績が良かったので目をかけられていたと本人は言っている。

幼少期の記憶はなぜか鮮明で、幼稚園ではいじめられ、家では常に兄からバカにされているよう

な視線を感じていて、今風に言うと自己肯定感がとても低かった。6才の頃から、「柱時計の振り子は自分が見ていない間も本当に動いているのか？」とか「他人も自分と同じように心を持っているのか」など考えるようになる。軽いうつ状態だったと思われるが、このときの悩みや疑問が現在の職業につながる。

小学校では幾分快活になる。私立中学を受験するが失敗。試験に落ちたことよりも、その後進学した地元公立中学での罰ゲームのような中学生生活がつかった。当時はヤンキー全盛期で、学校のトイレの鏡や便器は割れ、音楽室のピアノやオルガンの鍵盤は剥がされていた。授業中に上級生が乱入しないように、廊下側の窓や扉を針金で固定して授業を行った。生徒会長選挙では学校一のワルが当選した。そのときはじめて民主主義に疑問をもった。

からまれぬよう細心の注意を払いながら中学に通う。部活では、バスケットボール部に所属し主将を務めた。主将とは名ばかりで、今思えばリーダーとして何もしていなかった。校内暴力の嵐は徐々に収まっていったが、今度は暴力教師が力をふるうようになった。

高校は京都の洛南高校に進学する。これは同校のバスケ部だった兄の影響や当時のコーチからの誘いがあったからで、進学校だという理由で選んだわけではなかった。だが結局、腰を痛めたことや「勉強クラス」の特待生にされたことなどの理由でバスケを断念した。正直なところ、バスケにさほど情熱をもっていなかったし、怒鳴られたり殴られたりしながらスポーツをするのはもううんざりだった。

写真では伝わりにくいと思うが、現在の私の身長は190cmで、高校入学時でも185cmあった。

今でも5年に1度くらい「(元)プロ野球選手ですか?」と知らない人に話しかけられることがある。地元の中学の同級生に会うと「なんでプロレスラーにならへんかったんや?」と言われる。男たるもの、体が大きかったらプロレスラーを目指すべきだ、ということらしい。

高校の数学や理科を通して自然科学に強い興味をもっていたが、身近にロールモデルがおらず「理系の人生」が上手くイメージできなかったこともあり、大学は当初文系に進学した。もう一つ、80年台に流行したポストモダン思想に触れたことで、よく知りもしないのに科学の普遍性に疑問を抱くようになったことが影響している。ここで人生の道を大きく踏み外した。大学では普通に物理か電気工学を専攻していればよかったと後悔している

今まで京都大学とは不思議と縁がない研究者人生を歩んできたが、実は、高校卒業時、京大経済学部を受験して合格している。入試制度が大きく変わる時期で、京大と東大を同じ年に受験することができた。京大・東大の試験の後、京大の合格発表があり、東大の合格発表の前に、京大の入学手続きをしなければならなかった。京大を「蹴ら」ないと東大に入れないが、京大を蹴ってしまうと東大に不合格になっても京大には入れてもらえない。当時なぜそんな自信があったのかわからないが、京大の経済学部の入学手続きはせずに東大の合格発表を待ち、無事合格した。

高校の教師から「体が大きいから外交官に向いている」という真偽不明のアドバイスを受けたこともあるが、実際には特別な理由や目標もなく、東京大学の文科I類(法学部進学コース)に進学した。が、法学の授業で電気窃盗の議論(物体でない電気を盗むことは窃盗罪になるか?)を聞かされ、道を誤ったことを悟る。結局、法学部には進学せず、教養学部教養学科という何をやっても許される学科に進んだ。

子供の頃から意識や脳の問題に興味があった。しかし、自然科学の方法で研究するのは難しく、哲学や人文科学の研究対象であると思っていた。だが大学に入って、認知科学や人工知能、ニュー

ラルネットワークなど、心と脳の問題を自然科学や工学の構成論的アプローチで研究する分野があることを知る。はじめは、科学哲学、主に数理論理学を勉強していたが、その後、認知科学や神経科学に関心が移る。

今「人工知能」がブームだが、その実態は「第3次ニューラルネットワークブーム」である。私が大学に入った頃が「第2次ニューラルネットワークブーム」で、専門書が一般書店で平積みになるほどの盛り上がりであった。当時「人工知能」は、論理的なプログラミングをベースにした方法を指す言葉で、脳を模した仕組みでデータから規則を学習するニューラルネットワークとはむしろ対立する概念であった。

当時の指導教官の異動に伴い、大学院博士課程の途中から、カリフォルニア工科大学に移った。当初編入できるという話だったのだが、結局認められず、一般入試を受けて一から大学院をやり直すことになった。私が所属したのは、“Computation and Neural Systems”という、生物学、電気工学、コンピューターサイエンスが融合した学際プログラムである。そこで計算神経科学を本格的に勉強し、神経細胞のシミュレーションと心理実験を無理やりつなげた論文で博士号を取得した。

カリフォルニア工科大学にいた90年台後半は、クリントン政権下で景気もよく、研究予算も比較的潤沢であった。大学院生は少なかったものの、バイオ系を中心に多くの日本人が米国でポスドクとして研究していた。また、MBA取得のために留学する日本人も多かった。当時の米国留学やMBAには、まだ将来を約束するようなキラキライメージがあった。今はもうちょっと悲壮なイメージが加わっているのではないだろうか。

学位取得後、ハーバード大学とプリンストン大学で研究を続け、計7年間米国に滞在した。2001年には、9・11テロが起こった。ボストン発ロサンゼルス行きのボーイング767がニューヨーク世界貿易センタービルに突入したが、その前日に同じ航空会社の逆向きの便でロサンゼルスからボストンに引っ越してきたばかりだった。

2004年にジョージ・W・ブッシュが再選され、

---

米国生活がいやになってきた頃に、ATR 脳情報研究所の川人光男所長から声をかけられ帰国することにした。ATR は、京都府南端のけいはんな学研都市にあり、奈良にも近い。巡り巡って地元企業（ATR は株式会社）に就職したことになる。ヒラ研究員ながら、ポストクと秘書の予算をつけてもらい、恵まれた環境で自分のグループを立ち上げることができた。奈良先端大の客員教員として優秀な学生を受け入れ、プリンストン大学滞在中に始めた「ブレイン・デコーディング」の研究を発展させることができた。

米国滞在中は毎年のように日本から遊びに来ていた両親も老い、2010 年には父が他界した。母は、最近受けた大動脈瘤の手術の合併症で、意識

が戻らない状態が続いている。介護のまね事のようなこともやった。良いタイミングで帰国できたと思う。

帰国してから 10 年が経ち、今年縁あって京大に採用され、新しい研究室を立ち上げている。

以上が私の「参考にならない経歴」である。それでも、同世代の海外の研究者には、哲学から脳研究に転じたり、似たような経歴を持つ人がいて面白い。同時代を生きていると、似たパターンに収束することがあるのだろう。でもやはり「現在は存在しない 20 年後のキャリア」のロールモデルは存在しない。生まれ落ちた時代と環境の中で、自分で選び取っていくしかない。

## ◆ 紹 介 ◆

## 新任スタッフの抱負

[平成 26 年 4 月 16 日付着任]



複雑系科学専攻  
 応用数理学講座  
 知能化システム分野  
 助教 新 納 和 樹

2013年3月に情報学研究科の博士後期課程を修了後、特定研究員、特定助教を経て、2014年4月から複雑系科学専攻計算力学分野の助教に着任いたしました。

私は主に積分方程式を用いた数値解析の研究を行っています。数学や物理をベースとして、電磁波や音波などの解析を行うことに興味を持って取り組んでいます。今後は研究に加えて、授業やゼミを通じた教育にも尽力したいと思いますので、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひいたします。

[平成 26 年 8 月 1 日付着任]



社会情報学専攻  
 社会情報モデル講座  
 情報図書館学分野  
 助教 山 本 岳 洋

平成 26 年度 8 月 1 日付けで社会情報学専攻情報図書館学分野の助教に着任いたしました、山本岳洋と申します。平成 21 年に工学部情報学科に入学し、学部で田中研に配属され、そのまま修士課程、博士後期課程と進み現在に至ります。田中研学生時代から情報検索に興味を持ち、特にユーザの検索意図理解技術やユーザインタラクション技術の研究に取り組んでいます。今後は自身の研究だけでなく、講義や学生実験を通して教育にも貢献したいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。

[平成 26 年 10 月 1 日付着任]



知能情報学専攻  
 生命情報学講座  
 准教授 辻 本 悟 史

はじめまして、知能情報学専攻に着任いたしました辻本悟史と申します。学生時代を札幌で過ごした後、ワシントン DC、神戸、東京と引っ越しを繰り返し、このたび初めて京都に来ることになりました。その間、基礎的な動物実験から企業でのマーケティングリサーチへの応用まで、心理学

と脳科学について幅広く教育・研究・実践に取り組んできました。それを京都でどのように展開していけるか、とても楽しみにしています。魅力的な街、恵まれた環境で仕事ができること、すべての皆様に感謝し精進していく所存です。どうぞ宜しくお願い致します。

[平成 26 年 10 月 1 日付着任]



数理工学専攻  
離散数理分野  
助教 Aleksandar Shurbovski

2009 年に来日、京都工芸繊維大学工芸科学研究科機械システム工学専攻の博士前期課程を経て、2014 年に本研究科数理工学専攻後期博士課程を修了し、同年 10 月より本研究科数理工学専攻離散数理分野の助教に着任致しました。

エンジニアリングから始まり、離散構造でモデル化できる様々な問題に取り組み、離散数理の応用性に魅了されておりました。現在所属する分野とは異なる環境にいたこともあり、エンジニアリングについてはもちろん、幅広く役に立つ研究を目指しております。

異なる環境といえば、これから知らない仕事に戸惑うことも多々あると思いますが、皆様のご指導のほどよろしくお願い致します。

[平成 26 年 10 月 1 日付着任]



通信情報システム専攻  
通信システム工学講座  
デジタル通信分野  
助教 水谷 圭一

平成 24 年に東京工業大学大学院理工学研究科博士後期課程を修了し、独立行政法人情報通信研究機構ワイヤレスネットワーク研究所研究員を経て、平成 26 年 10 月 1 日に通信情報システム専攻デジタル通信分野の助教に着任致しました。無線通信システムの物理層信号処理に関する研究に従事し、新たな周波数資源を確保するためのホワイトスペース技術や、より高能率な無線通信を実現する第 5 世代移動通信システムの研究開発に取り組んでおります。情報学研究科のより一層の発展に貢献すべく、微力ではございますが研究教育活動に精一杯精進して参る所存でございます。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。

[平成 26 年 11 月 1 日付着任]



社会情報学専攻  
生物圏情報学講座  
生物環境情報学分野  
助教 Christian E. Vincenot

2014 年 11 月に生物圏情報学講座の助教に着任いたしました。京都大学の協定校でもあるフランスのストラスブール大学で組み込みシステム専攻の修士課程修了後、京都大学で生態系モデリングの研究を行い、学位を取得いたしました。

2011 年 8 月から日本学術振興会の特別研究員としてクビワオオコウモリの保全活動を研究しました。これからは、コウモリや環境シミュレーションの研究に加えて国際交流および留学生の支援にも尽力したいと思います。ご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い致します。

## ◆報 告◆

第16回情報学シンポジウム  
「ビッグデータとヒューマンサイエンス」開催報告

システム科学専攻 教授 石 井 信

平成27年3月17日(火)に、京都大学百周年時計台記念館において、情報学研究科主催による第16回情報学シンポジウム「ビッグデータとヒューマンサイエンス」が開催された。今回は、前回同様の京都大学ICTイノベーション(第10回)との共催に加え、情報処理学会との共催であった。事前登録者は764名(一般303名、学内221名、情報処理学会員240名)、当日の参加者は453名(主会場435名、サテライト会場18名)に達し、この中には高校生の参加も見受けられた。本会場内は、空席よりも立ち見が目立つように、始終大勢の参加者で賑わっており、大変盛況な会となった。事前登録者数の増加に鑑みて、最大収容人数500名の百周年記念ホール(主会場)が溢れる可能性が生じたため、法経第7教室をサテライト会場とし、テレビ中継を行った。

シンポジウムの様子は、ドワンゴ社によるインターネット動画中継配信サービス「ニコニコ動画」によって全世界にリアルタイム配信され、録画はイベント後にも無料視聴可能な形で公開された。これは情報処理学会の企画の一環として、第一会場(百周年記念ホール)で行われるイベントを配信するもので、情報学シンポジウムが参画する形で実現した。シンポジウムは情報処理学会初日のトップバッターのプログラムとして位置付けられた。なお情報処理学会初日の視聴者数は、本稿執筆時(平成27年4月現在)で6万人を超えたようである。

今回のシンポジウムでは、システム科学専攻が世話役を担当して企画を行い、「ビッグデータとヒューマンサイエンス」とタイトルをつけ、大規模データに基づいて実社会にインパクトのある研究を遂行中の第一線の研究者3名を選び講演を依頼した。こうしたタイトルと講演者を選ぶにあ

たっては、地域の一般の方々、高校生、大学生、若手研究者が対象であること、情報学領域において近年の注目を集めるトピックであることを重視した。HP、学内外のメーリングリスト、ポスター、チラシ等で広報活動を行った。また、ICTイノベーション事務局の協力のもと、ニコニコ動画によるストリーミング配信、サテライト会場での中継、また、本会場には聴覚障害者向け字幕タイピングのスクリーンが設置された。プログラムは、佐藤研究科長の開会の挨拶から始まり、神谷先生、黒田教授、上田先生の順で「ビッグデータとヒューマンサイエンス」に沿った内容で講演いただいた。各講演に対しては、システム科学専攻の大羽講師、中尾准教授、大久保講師がそれぞれ司会を務めた。最後に全体司会を務めた石井の閉会の挨拶をもって、滞りなく終了した。

第一の講演として、「脳から心を読む技術：脳情報デコーディング」と題して、神谷之康先生(ATR脳情報研究所神経情報学研究室室長)にお話いただいた。脳の非侵襲計測によって得られる信号を心の状態や行動をコード化している「暗号」と見なし、その暗号を解読(「デコード」)することによって心を読む、というデコーディング研究に関して、神谷先生のグループで行われている研究の数々を紹介いただいた。中でも、情報学的方法、とくに統計的機械学習の役割の大きさが強調された。またヒトが眠っている間に見る夢の内容を読み取る研究の紹介の際には、実験風景のビデオなどを駆使され臨場感を共有しながら研究の詳細を熱く語っていただいた。当初視覚的情報のデコーディングにチャレンジしたところ困難だったものを、意味内容のデコーディングを対象を変えたところで成功に至ったという経緯など、興味深い話を聞くことができた。



第二の講演として、「情報通信技術は医療をどう変えようとしているのか?」と題して、黒田知宏先生（京都大学医学部附属病院医療情報企画部教授）に講演頂いた。1999年の電子カルテ解禁以降、臨床現場の情報化が急速に進み、今やコンピュータの利用が日々の臨床業務に必要不可欠となっている。臨床業務は情報交換の連続であり、情報化によって大量の情報が電子的に蓄積されるようになり、その解析が進められる一方で、電子カルテを介して入力される情報がしばしば未整理である現状について紹介された。航空業界などの他の先例にも学ぶという基本に立ち返り、通常の診療業務の中でデータと認識を分離する、医療行為における主観と客観の両方を計測することの重要性を、教育的立場も含めて講演された。講演の後半では、医師の仕事が情報システムに組み込まれ、病院の機能が社会に組み込まれるという将来の医療サービス像、変遷する情報化時代における病院像についても提言いただいた。病院における診療と福祉・介護にギャップがある現代の医療の問題を取り上げられ、検査や診断、リハビリの一部を家庭に提供するソーシャルホスピタルの考え方、および、その実現に果たす情報学の役割について解説された。われわれの生活に身近な話題として、大学関係者だけでなく企業や一般の参加者からも多数の質問が行われ、参加者にとって今後の医療サービスのデザインと情報システムの活用を考える貴重な機会になったと感じられた。

第三の講演として、「機械学習技術によるビッグデータチャレンジ」と題して、上田修功先生（NTTコミュニケーション科学基礎研究所機械学習・データ科学センタ代表）に講演いただいた。近年、多種多様なデータを利活用して新たな価値創出につなげるためのビッグデータ分析が注目されており、またその分析の基盤技術として機械

学習が有望視されている。上田先生からは、人工知能研究の歴史的な経緯の紹介に始まり、機械学習の基本的な考え方の説明、さらにリコメンデーションシステムや看護現場などにおける実データ解析の例といった実践的な応用の話題も踏まえた密度の濃い講演をいただいた。特に生成モデルを用いた機械学習手法については、基本となる数式を提示していただいた上で、重要な概念についてポイントを絞って、初学者でも理解できるように説明していただいた。陽には見えないデータの生成過程を考慮しながら適切な生成モデルを作る部分が分析におけるポイントであるとのことである。例として購買ログデータなどから類似したグループを取り出す「共クラスタリング」について紹介いただいた。これらの具体例も含めた講演は、この分野に興味を持っている学生、他分野研究者にも非常に役立つ内容になったと思われる。また講演後には、学生に対するメッセージとして、自分のやっていることがどのような価値を生み出すのかを意識することの重要性を指摘いただいた。最先端の研究の紹介だけでなく、教育的にも意義深い内容となったのが印象的であった。

最後に、本シンポジウムを企画・開催するにあたっては、実行委員会として、システム科学専攻の中尾恵准教授、大久保潤講師、大羽成征講師に企画、広報などを、岩橋純子補佐員、福田美紗補佐員に準備・運営を担当して頂いた。ICTイノベーション実行委員長・河原達也教授（学術情報メディアセンター）には、ICTイノベーションおよび情報処理学会との橋渡しを大変密に行っていただいた。情報処理学会の皆様には会場設営・運営・動画配信について多大なお世話を頂いた。この場を借りてこれらの方々に深い感謝を表したい。



第一講演者 神谷之康先生（ATR 脳情報研究所神経情報学研究室室長、  
2015年4月より本学情報学研究科知能情報学専攻教授）



第二講演者 黒田知宏先生（京都大学医学部付属病院医療情報企画部教授、  
本学情報学研究科社会情報学専攻協力講座教授）



第三講演者 上田修功先生（NTT コミュニケーション科学基礎研究所機械学習・  
データ科学センタ代表、本学情報学研究科システム科学専攻連携教授）

# 京都大学第9回 ICT イノベーションの開催報告

実行委員長 河原達也

「京都大学 ICT イノベーション」は、情報学研究科、学術情報メディアセンターで研究開発されている情報通信技術 (ICT) を公開し、産官学連携を促進するためのイベントである。前回から、デザイン学大学院連携プログラムにも主催者に加わって頂き、今回で第9回を迎えた。今回も企業説明会を併催し、また情報学シンポジウムと連携して同日開催とした。これに加えて今回は、情報処理学会第77回全国大会と同時開催とし、広報・集客における相乗効果を狙った。第9回 ICT イノベーションは、学会初日の3月17日(火)に京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールで開催し、研究科内のイベントである企業説明会は前日に同会場で行った。

## 展示内容：

11月から12月にかけて各研究室に出展を呼びかけたところ、48件の出展があった。アルゴリズム、情報通信基盤、メディア情報処理、ウェブ・ソーシャルサービス、実世界向けソフト・システム、デザイン学関係のように分類を行った。これらに加えて、本学における産官学連携活動の展示が3件あった。

## 広報・参加申込：

広報は、Webサイトの他、ポスター・パンフレットの関係機関・学会員への送付、関係メーリングリストでの配信、そして企業説明会の出展企業や過去の本イベント参加者に対する案内など多様な手段により行った。また、情報処理学会全国大会の参加申込サイトでも受け付けてもらった。その結果629名(うち173名が学内)の事前参加申込があった。一般申込者の所属機関での役割を円グラフに示す。約半数が研究開発で、残りが産学

連携、人事、マーケティングの順になっており、本イベントの想定する層になっていると考えられる。ただし今回は、企業説明会と別の日にしたため、その参加者の多くを取り込むことができなかった。

## 当日の状況：

情報処理学会全国大会の方に当日受付を一元化した。ただし、本イベントの参加者は、会場の国際交流ホールの入口でクリアファイルに入れたパンフレットを手渡しすることで計数した。それに基づく当日の参加者数は633名(うち来賓9名、展示発表者50名)である。参加者数では前回に及ばなかったが、展示会場の人口密度や活気の点では例年を上回っていたように思える。当日開催した組織委員会で、毎年来られている来賓の方から「例年に比べて活発にプレゼンや討論がされている」との言葉を頂戴した(写真を過去のものと比較されたい)。企業説明会に来たリクルータの代わりに、情報処理学会に来た研究開発者が増えた効果と考えられる。晩に実施した交流会(懇親会)も学会と合同で開催し、例年より大幅に多い261名の参加者があった。

## 企業説明会：

前日16日に開催した企業説明会には60社の出展があり、本研究科学生の参加者は147名であった。今年度から就職活動の時期が後ろに変更になったため、企業側・学生側ともに少し戸惑っている様子であった。

## 情報処理学会との連携効果：

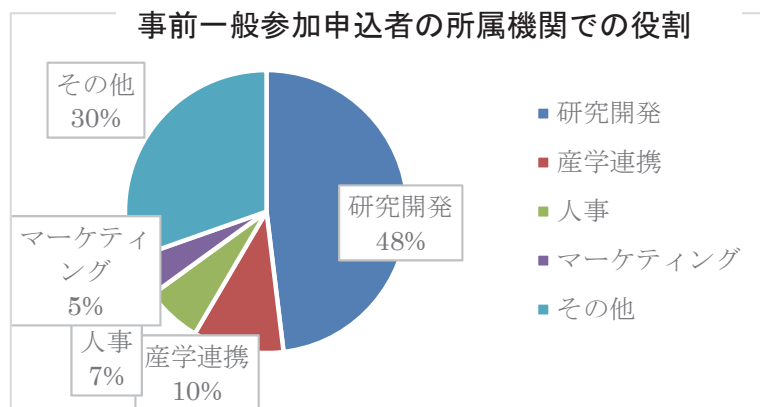
事前参加申込の数字では、互いのイベントに参加する数が2百~3百名程度いたので、双方にかな

りの上乗せ効果があったと考えられる。同様に学会と共催した情報学シンポジウムでは、5百名の会場があふれる状況になった。ICTイノベーションの方は、企業説明会と別の日にしたために総参加者数自体は前回から減少したが、研究開発者の参加が増えたために非常に活気に満ちたイベントとなった。何よりも、例年の参加者層と異なる多くのICT関係者に参加してもらえたのがよ

かったと考えている。

本イベントの開催に際して、組織委員会・実行委員会及び事務局をはじめとする研究科・センターの皆様には多大なご協力・ご貢献を頂きました。深く感謝申し上げます。

(参考) Web サイト : <http://ict-nw.i.kyoto-u.ac.jp/ict-innovation/2015/>



## 情報処理学会第 77 回全国大会の開催報告

知能情報学専攻教授／情報処理学会第 77 回全国大会プログラム委員長 黒橋 禎夫

「社会に浸透し、社会を変革する ICT」をスローガンとして、3月17日～19日、情報処理学会第77回全国大会が京都大学で開催されました。大会のプログラム委員長を務めさせて頂きましたので、この場をお借りして報告させていただきます。今大会では、吉田南の31会場で約1400件の一般・学生発表を行い、百周年時計台記念館と吉田南の大教室の6会場でイベントを開催しました。参加者数は3600人超となり、東京大学での学会創立50周年の第72回大会に継ぐ過去2番目の規模となりました。京都大学第9回ICTイノベーション、第16回情報学シンポジウムと共催とさせて頂いたこと、さらに、同時期に京都大学で開催された言語処理学会年次大会との相互の後援も参加者増の要因であったと思います。

今回の大会ではさまざまな新しい試みを行いました。まず、従来はプログラム委員、学会の委員会・研究会などに限られていたイベントの提案を会員であれば誰でも提案できることとし、様々な魅力的な提案により6並列でイベントを開催することができました。特に、新進気鋭の若手研究者による弾丸トーク、IPSJ-ONEは大変な好評を博しました。また、ダウンゴと情報処理学会の提携に基づき、2会場のイベントをニコニコ生放送



で動画中継し、延べ15万人が視聴しました。これは学術コンテンツを広く社会に届ける上で大きな意味があったと考えます。また、学会の盛り上がり可視化するWebアプリ、IPSJ77Nowを京都のIT系学生コミュニティと開発・運用しました。今回はやや宣伝不足でしたが、今後につながればと考えています。さらに、託児所の開設や情報保障（第一イベント会場での字幕付与とその他要望に応じた対応）を実施しました。

全国大会の開催意義についてはさまざまなご意見がありますが、学生を含め研究者・技術者が自身の研究を発表しfeedbackを得るというベースとなる価値に加え、そこにければICTの今を俯瞰することができる、様々な専門分野のトッププレイヤーの生の声を聞き、質問することができる、情報処理学会の広範な活動を知ることができる、そのような意義は大きく、そのことを今回の大会で幾ばくか示すことができたのではないかと考えております。

このように多くの新たなことに取り組んだ大会でしたが、失敗もありました。京大山極総長の招待講演の際、スライドがプロジェクタに投影されず講演が9分程度中断しました。裏話をしますと、総長にはずっと動画中継の許可をお願いして



いましたが、最後の最後、登壇されてマイクをつけ、パソコンをつなぐ間もお願いを続けようやく許可を頂きました。ほっとして、講演と中継が始まり、総長がプロジェクタに何も映さないまま話を始められましたが、導入のお話だったのでそういう演出かと思って聞いていたところ、「あれ、これ映ってませんね」ということになり、そこから9分ほどの中断となってしまいました。油断大敵であったと反省しております。

このように全国大会を成功裏に終えることができたのは、大会委員会、プログラム委員会、実行委員会、学会事務局をはじめ、多数の皆様の献身的なご貢献のおかげです。特に、実行委員長の岡部寿男先生、実行副委員長兼 ICT イノベーション実行委員長の河原達也先生をはじめとする京都大学の実行委員会の先生方、情報学シンポジウム実行委員長の石井信先生には大変にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

# 京都大学情報学研究科平成 26 年度公開講座報告書

通信情報システム専攻 教授 守 倉 正 博

2014年8月9日(土) 13:00 より 16:30 まで「スマホのしくみとテクノロジー」というテーマで公開講座を行いました。台風の影響で参加申込の取り下げが相次ぎましたが、最終的な参加者は、70名で、内訳は、中学生 1名、高校生 48名、一般 21名でした。

佐藤亨研究科長の開会の挨拶の後、通信情報システム専攻の守倉が「スマホはどうやってつながるの?」というタイトルで講演いたしました。無線通信の歴史について、狼煙など古典的な意思伝達方法から始まり、現在の携帯ネットワークに至るまでの変遷を紹介しました。無線通信の歴史の中では、アナログ通信とデジタル通信が繰り返し登場することなど、技術は螺旋階段状に進歩してきたことを紹介しました。さらに、現在使われている携帯電話ネットワークの仕組みと課題に関して解説いたしました。参加者の10代のAさんは「スマホは様々なことが考えられ、また苦労されているのだなということがよく分かりました。情報の歴史についての説明は分かりやすかったです。」と述べていました。

次に、同専攻の新熊亮一准教授から「スマホは相棒?」というタイトルで講演いただきました。スマートフォンにおいてアプリケーションが動く仕組みについて、ハードウェアとOS、OSとアプリケーションの関係からわかりやすく紹介されました。その中で個人情報を利用するアプリケーションとの上手な付き合い方について議論されました。自身の情報を提供することでよりよいサービスを受けられる可能性があるが、それには同時に個人情報流出や犯罪に巻き込まれる可能性があることなどについて説明されました。普段から何気なく携帯電話やスマートフォンを活用する中高生にとって情報リテラシーを考える

よい機会となりました。10代の参加者のBさんは「これからの未来を担っていくのは僕たちだから、しっかりと自覚を持ってこれからいろんな技術を身につけていきたいと改めて思いました。」と述べていました。

最後に、同専攻の原田博司教授から「スマホはこれからどのようなようになるの?」というタイトルで講演いただきました。無線通信の技術的な難しさについて解説され、これまでの高速化技術の進歩と現在の課題に関してわかりやすく紹介されました。無線通信では、情報を複雑な電気信号に変調することで一度に多くの情報を送信できることや、その変調された信号を復調することの難しさについて説明されました。特に、屋外での通信の場合、直接波と様々なところからの反射波が干渉しより困難になることについて、難解な技術的な話をイラストや動画を交えてわかりやすく解説し、講演参加者も大いに興味を示しました。10代の参加者からは「スマホも衛星通信だと思っていたから、すごく身近に基地局があって地上通信をしていることに驚きました。」「スマホを使用する者として中身など興味を持てた。これからも進化するのがすごいと思う。」などと述べていました。

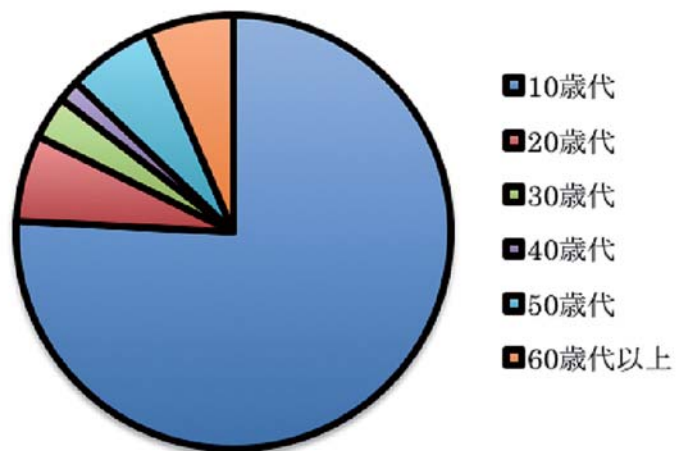
いずれの講演でも聴講者から多数の質問が寄せられ、関心の高さを感じました。また、中高生からは「今回の講座で今まで知らなかったことを知ることができたので良かったです。また、この講座を機会にさまざまな分野に興味を持ち、自分の進路を決めていきたいと思いました。」「予想とは違い、私の知らなかったたくさんのお話を聞いて、とてもためになりました。これからのスマホの進歩がとても楽しみです。」など、意欲的な感想を多くいただきました。また、一般の参加者か

らも「スマホのテクノロジーのお話しは、難しかったですが非常に面白いものでした。このように普段使っているすごいテクノロジーについて教えていただけると有難いです。」「佐藤先生のおっしゃられたように、今の技術は中身がわから

ないものが多く、高校生には「どうやっているの?」と考えて欲しいと思います。このような講座をぜひ続けて下さい。」など、好意的な意見を多くいただきました。



公開講座の様子



出席者 70 名の年齢別内訳



## 第7回 アジア情報学セミナー（インドネシア）報告

知能情報学専攻 教授 鹿島久嗣

2014年9月16日から20日迄の日程で、アジア情報学セミナー開催のためインドネシアを訪問した。ベトナム、タイ、台湾、韓国など過去6回にわたってアジア諸国で開催されてきた当セミナーでは初めてのインドネシアでの開催となった。その主な目的は研究交流であるが、これと併せて重要な目的のひとつが京大への留学志望者増加を目指した広報活動である。

今回の訪問メンバーは情報学研究科教員8名、博士課程学生（インドネシアからの留学生）1名、事務1名の計10名のメンバーで下記のとおりである：

- ・佐藤 亨 研究科長（当時）
- ・山本 章博 副研究科長（当時）
- ・梅野 健 数理工学専攻 教授
- ・鹿島 久嗣 知能情報学専攻 教授
- ・林 和則 システム科学専攻 准教授
- ・永原 正章 複雑系科学専攻 講師
- ・Donghui Lin 社会情報学専攻 助教
- ・西尾 理志 通信情報システム専攻 助教
- ・エマミ 美代子 情報学研究科事務室
- ・Kemas Muslim Lhaksmana 社会情報学専攻 博士後期課程2回生（当時）

なお、Kemas Muslim Lhaksmana氏は、インドネシアからの留学生であり今回の訪問がスムーズに行われたのも氏の同行によるところが少なくない。

インドネシアは増え続ける自動車の数に道路の整備が追い付いていないという状況で、道路交通事情が大変に悪く、都市間の移動を含む今回の旅程は若干の強行軍となったが、滞在中の3日間で9月17日にインドネシア通信情報省（MCIT）（コンタクト先：Rudi Lumanto博士）との合同ワークショップを開催、18日にはインドネシア大

学 計算機科学科（コンタクト先：Mirna Adriani 学科長）、19日にはバンドン工科大学 電子工学・情報科学研究科（コンタクト先：Suhono Harso Supangkat 教授）を訪問した。訪問先のインドネシア大学、バンドン工科大学はいずれもインドネシアのトップ大学であり、すでに京都大学との提携や個別の研究者・プロジェクトレベルでの交流は行われている。一方、合同ワークショップを開催した通信情報省も傘下に多数の研究員を抱える研究所である。

いずれの訪問先でも大変友好的な歓迎を受け、延べ200名を超える参加者（情報通信省との合同ワークショップでは84名、インドネシア大・バンドン工科大でのセミナーはともに65名の参加者）もありいずれも大盛況であった。全体を通じて参加者に占める女性比率は非常に高く、印象的であった。各訪問では、双方の研究科長クラスから組織や国際協力の状況の紹介があったあとに、双方から数名ずつの研究者による研究紹介と討論を行うという形式で行った。インドネシア側からは、言語や文化・教育などインドネシアに密着したテーマも多く見られた。インドネシアは非常に多くの言語をもつことや、多くの島々に分断されていることなどは我々にとっても今後の研究の発想のヒントになるかもしれない。テーマは極めて広範に渡るものであったにも関わらず質疑討論は活発に行われ、帰国後も何件かのテーマについては共同研究等の議論が続いているようである。

インドネシア大学とバンドン工科大学では、京都大学大学院の入試説明会も行った。多くの参加者から具体的なステップや入試の内容、指導教員・テーマをいかにして探すかなどかなり具体的な質問があり、留学先としての日本、とりわけ京

都大学への留学が非常に肯定的に意識されているという印象であった。これには学部長クラスから一般の教員まで、日本の大学で学位を取得した教員が多いことも影響しているものと思われる。一方で、組織（情報通信省）内での海外留学の奨学金制度への応募には入学が決定している必要があることや、あるいは実際に来日して入学試験を受ける必要があることが壁になっているといったことなど、具体的な入試制度やサポート面での課題が明らかになった。また傾向としては、教員・研究員の中でも博士の学位を未取得である方が大変多く、現地の学生だけではなく、ここで研究あるいは教鞭をとる学位未取得の方を留学生として迎えることをより戦略的に考えて

いくことが重要と思われる。

結論として、今回のアジア情報学セミナーにおけるインドネシア訪問は一定の成功を収め、アジア地区における今後の方向性に重要な示唆を与えるものであったといえるだろう。今後も研究提携先としてあるいは留学生の獲得先としてのインドネシアをより戦略的に捉え、アジア情報学セミナーでの継続的な訪問を含め検討していくことは得策と思われる。そのためには、研究テーマや指導教員の選定をサポートする一元的なコンタクト先の設置や、現地での入試開催など制度面での施策を検討していくことが課題となるものと思われる。



インドネシア語で挨拶を述べる佐藤研究科長（当時）  
（インドネシア大学にて）



MCIT との合同ワークショップの様子



留学志望学生との懇談の様子  
（バンドン工科大学にて）

## アジア情報学セミナーの開催報告

社会情報学専攻 石田 亨

ミャンマーは「アジア最後のフロンティア」と呼ばれる。アジア情報学セミナー担当の指名を受けたときに、市場・組織情報論分野にミャンマー出身の修士学生が在籍していたことを思い出した。聞けばミャンマーの大学と交流していたと言う。指導教員の横澤誠客員教授から UCSY (University of Computer Studies, Yangon (Bahan Campus)) の Saw Sanda Aye 副学長を紹介頂いた。また、同副学長から UCSM (University of Computer Studies, Mandalay) の副学長を紹介頂き、ミャンマーの南北の要とも言える2つの大学への訪問が決まった。訪問団は山本章博教授、太田快人教授、水谷圭一助教、エマミ美代子特定職員と私の5名である。

UCSY はヤンゴンに位置し、ミャンマー南部の12の Computer University を統括している。ヤンゴンではバイクが禁止されているためか、幹線道路は乗用車が整然と進み、印象は先進国と変わらない。「ヤンゴンの街と人々の熱気、そして彼らの純粋な眼差しからは、現在進行形で新しい時代に突入しているミャンマーのパワーと無限の可能性を感じた。(水谷)」

Bahan Campus は2年半前に生まれた新しいキャンパスで、増大する教育需要に応じて拡大している。多数の教員(レクチャラー)が雇用されているが、その多くは修士号を取得しただけで博士号は有していない。富士通の現地法人の日本人技術者が、教員を集めて技術指導している様子を見学し、日本企業の進出を垣間見ることができた。「国自体の様子が、民主化直後の東欧を思わせるもので諸外国の多くの大企業の力を借りて発展しようとしており、大学のスタッフも希望を持っ

て教育にあたっているようであった(山本)。」

シンポジウムには40名ほどが参加した。学生は試験中で、参加者は教員が中心だった。太田教授が欧州の大停電を説明している時に、偶然にも2度の停電が生じた。「たびたび起こる停電。増大するエネルギー使用量に水力発電に頼る現状が対応しきれていないことが伺える。社会インフラの効率化においても情報学が果たすべき使命は大きいだろう。(水谷)」

一方、UCSM はマンダレーに位置し、ミャンマー北部の13の Computer University のハブとして機能している。図書館には、UCSY を含むミャンマーの Computer Studies に関わる全ての博士論文が収録されていた。博士取得者は多いわけではないが、欧米に頼らず自前で博士を輩出している。研究のレベルに難があったとしても、博士を自分たちで育てる教育の土壌がしっかりとあることは、今後の展開の支えとなる。シンポジウムには60名程度が参加した。博士課程学生の発表が新鮮であった。

教員や博士課程学生と夕食を共にし、懇談をする機会があった。UCSY もそうであったが、ここでも教員のほとんどが女性であった。「今回の訪問で出会った唯一の男性教員とマンダレーでの夕食会でテーブルをともにした。男性が職場に少ないのは、教員給与が低いため多くの男性が職場を外国に求めて国を出ているという説明である。シンガポールで数年働くと永住権を得ることも魅力らしい。英語よりロシア語のほうが上手で、ロシアや独立国家共同体にしばしば行くとのことで、かなり人の動きがあることを感じた。(太田)」

UCSY も UCSM も、世界各地の大学と交流を進めている。今なら、我々にも手伝えることが多くあるように思う。「旧東欧と同様に、独自で学位を出してきたので、いきなり博士課程学生留学を勧めるのは難しいかもしれないが、教員との共同研究を進めれば、留学生も来始める可能性はあると感じた。(山本)」

訪問団は、僅かな空き時間に駆け足で仏教寺院を見学した。歴史ある寺院だが遺跡と呼ぶのは妥

当ではない。仏教は現代の生活の隅々に浸透し力を失っていない。寺院は多くの参拝者で溢れていた。素足になって広大な石畳を歩いていると、失われていた足裏の感覚が蘇った。「マンダレーヒルの頂上に裸足で降り立った。そこから眺めるマンダレーの景色はどこか懐かしい風光明媚なものであった。これから10年のうちにこの風景もめまぐるしく変化するのだろうか。(水谷)」駆け足の訪問であったが、訪問団の心にミャンマーが深く刻まれた3日間だった。



University of Computer Studies, Yangon (Bahan Campus) でシンポジウム参加者と

# 京都大学サマーデザインスクール 2014 の開催報告

実行委員長（デザイン学ユニット特定准教授） 荒 牧 英 治

2014年9月24日～26日の日程で、京都リサーチパークにて、京都大学サマーデザインスクール2014が開催された。本スクールは、社会に実在する問題に対して学生と社会人の混成チームが解決策を考える3日間のイベントで、2011年に初回が開催され、今回で4回目の開催となる。

昨年からのデザイン学大学院連携プログラムの公式イベントとして開催され、主催にはデザイン学大学院連携プログラム、情報学研究科、経営管理大学院、デザインイノベーションコンソーシアムが、共催には工学研究科、教育学研究科、学術情報メディアセンターに加え、京都市立芸術大学美術学部・美術研究科、京都工芸繊維大学工芸科学研究科も加わる産学をまたがるイベントとなっている。

本スクールの規模は年々拡大しており、本年度は、20種類のテーマに、実施者83名（社会人38名を含む）と受講者111名が3日間にわたって挑んだ。従来どおり費用は実施者負担、受講しても単位ならず、旅費の補助はないという「やりたい人だけがやるスクール」という原則は継承しつつも、今年度からは、提案されたテーマに実行委員会がコメントを返すというフィードバック制度を導入し、自由な中にも、さらなる質の向上を狙った。

3日間のスケジュールは、初日から2日間に渡って、テーマ毎に活動し、最終日3日目に成果発表を行なうというものである。ここでいう活動とは、テーマ毎に自由に実施者がデザインし、例えば、デザイン手法に関する講義から始まるテーマ、徹底的な議論を継続するテーマ、ワークショップ、フィールドワークを行なうテーマなど

バラエティ豊かである。

3日目午後の発表会は、もっとも盛り上がる一瞬である。全員1会場に一同集まり、3分の短い発表を行った後に、ポスター発表も合わせて行う。この異なる発表スタイルの組み合わせにより、発表であたりをつけたテーマの詳細をポスターにて詳しく聞くことができる。

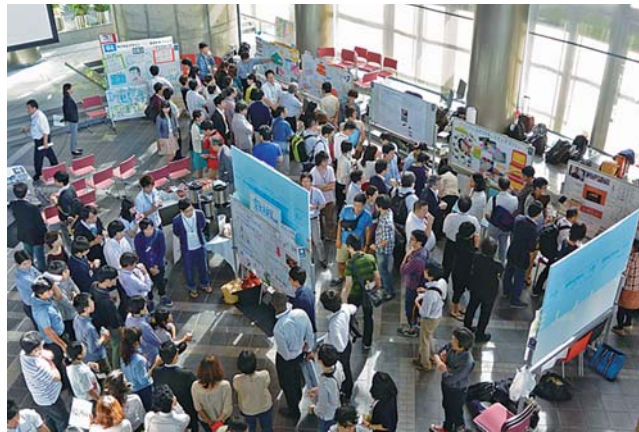
このように従来の大学講義とはまったく異なる新しい学習・教育を模索する「京都大学サマーデザインスクール」であるが、アンケートでは88%の参加者が来年も参加したいと回答し、非常に満足度の高いイベントになっている。なお、次のサマーデザインスクールは2015年9月16日～18日の日程で開催予定である。

最後になったが、本スクールはテーマの提案や実施において、産学の関係諸氏の多大なるご協力のもとで開催されており、ここに改めて感謝の意を表したい。



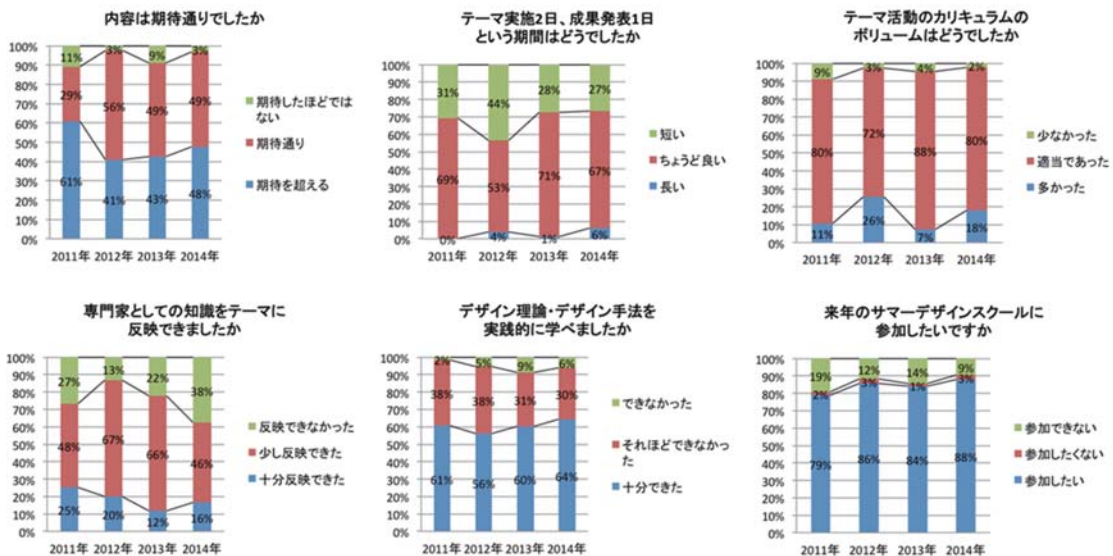
会場の様子

01 学び方のデザインー盲点を見つけよう (サイボウズ・ラボ株式会社)	11 御堂筋における街路を軸とした都市活性化デザイン (竹中工務店)
02 20年後の未来を支える初等教育環境のデザイン (パワープレイス株式会社)	12 イキイキとしたライフスタイルの支援デザイン (オムロン株式会社)
03 街角観察における ICT サービスデザイン (NTT サービスエボリューション研究所)	13 シェア時代のデザイン (三菱電機)
04 行為情報のデザイン (情報学研究科、他)	14 商業施設における M2M ネットワークデザイン (情報学研究科、他)
05 社会的問題の理解と解決のためのゲームデザイン (教育学研究科、他)	15 孤独死を楽しく防ぐ介護オーケストレーションのデザイン (情報学研究科、他)
06 kickstart (東芝)	16 PLAYFUL 空間大作戦: タッチ、アタッチ&デタッチ (工学研究科、他)
07 2050年の京都の交通をシミュレーションで予測する (情報学研究科、他)	17 ハイスピードカメラを使って日本文化を表現し、プロジェクションマッピングデザインを考えよう (学術情報メディアセンター、他)
08 フィールドベースの不便益システムデザイン (デザイン学ユニット、他)	18 ハンディキャップをもった人が活躍できるサービス (NTT データ、他)
09 理想の社会のための新しい受験システムをデザインする (博報堂)	19 コミュニケーションカフェのサービスデザイン - エクスペリエンスを超えて - (経営管理大学院、他)
10 ペットと人の共生社会デザイン (博報堂)	20 お墓参りのリデザイン (総合博物館、他)



発表会の様子

アンケート結果



# 留学生受入拠点整備事業 報告

グローバル 30 ワーキング・グループ 山本章博

## 1. はじめに

平成 21 年度から開始された「国際化拠点整備事業」につきましては、本学では「京都大学次世代地球社会リーダー育成プログラム (Kyoto University PROgrams for Future International LEaders : K.U.PROFILE)」として採択され、平成 23 年度より「大学の国際化のためのネットワーク形成事業」に改められた上、平成 25 年度まで継続していました。事業開始当初はグローバル 30 事業、略して G30 事業とよばれていました。本広報におきましては、第 12 号から毎年報告してまいりました。

平成 26 年度は、文部科学省の事業ではなくなりましたが、本学では「留学生受入拠点整備事業」として、学内予算を用いて継続されることになりました。

## 2. 平成 26 年度の事業内容

留学生受入拠点整備事業は G30 事業からの継続ですので、研究科における事業内容は、教務の国際化、および G30 において知能情報学、社会情報学、通信情報システムの 3 専攻に設置されました国際コースの教務に関するものが中心といたしました。前者としましては、大学院学生募集要項や学修要覧を始めとする様々な教務書類の英文版の作成など、後者としましては、国際コース設置専攻を中心とした英語で開設されている科目の TA の雇用、「情報学展望 4」「情報学展望 5」の講師招待、特定事務職員、事務補佐員の雇用などを行っています。

英語で行われている科目の延べ履修者数、国際コース修了証が授与された学生はそれぞれ、表 1、表 2 のようになっています。

国際コースが設置されている専攻の入試説明

会では、国際コースを紹介しています。評価広報委員会で開催されている「アジア情報学セミナー」においても本研究科への留学説明の時間に国際コースを紹介させていただいています。

## 2. 特定教員について

文部科学省による G30 事業期間が残り少なくなってきた平成 25 年に本学で国際化戦略「2x2020」が策定され、教育の国際化はその中に組み入れられました。また、同年に設置された国際高等教育院もこの国際化戦略の中に位置づけられました。G30 特定教員の中で David Avis 特定教授、Adam Jatowt 特定准教授、Xuefeng Liang 特定准教授の 3 名については、国際高等教育院での教育をも担当する研究科特定教員に異動されました。Marco Cuturi 特定准教授はすでに本研究科の准教授に異動となっており、平成 26 年度からは G30 ワーキング・グループ委員長を務められています。なお、同ワーキング・グループでは、研究科内の外国人教員に対して、オブザーバとして参加することをよびかけ、研究科における教育国際化に関する連絡を密にすることを心がけています。

## 3. G30 の今後と後継プロジェクト

平成 26 年 2 月 14 日に G30 総括シンポジウムが福岡で開催されました。その報告書をみますと、文部科学省からのプレゼンテーションにおいて、「G30 がスタートした背景には、世界の大学間で国際競争が激化する中、日本の大学は競争に伍していくだけの国際化が不十分だという認識があった。文部科学省としても G30 のような取組は初めてであったが、大きな成果が表れている。この 5 年間で 13 大学は大きく変わった。」と総括する一方、「ますます加速する世界のグローバル化

に向けさらに変わり続ける体制が必要だと思う」としています。文部科学省は東京大学内に設置している国際化拠点整備事業推進事務局と広報ホームページを継続しており、今後も「G30」という名称を使い続けると推測されます。

本学では、平成27年度から、留学生受入拠点整備事業は「国際化支援体制強化事業」に組み換えられることになりました。この事業では、特色ある留学生コースの実施に加えて留学生短期受入プログラムの開講を組合せることにより、留学生数を増加させることを目的としています。本研究科からは、国際コースと同年夏に開催を計画している機械学習サマースクール（MLSS 2015）を組合わせる事業案が採択されています。

一方で、日本学術振興会による新たな事業としてスーパーグローバル大学等事業「スーパーグローバル大学創成支援」が開始されました。本学からは「京都大学ジャパングートウェイ構想」が採択されています。K.U.PROFILEに参画してい

たほとんどの部局はこの構想には参画しておりません。上述のG30総括シンポジウムでも指摘されていたように、2つの事業の相乗効果をどのように高めてゆくかが、課題であり、また期待されていると考えられます。

## 5. おわりに

例年のことですが、本事業は多くの教職員の方々のご協力と、国際コースを選択する学生の熱意で支えられています。末筆ながら、このすべての皆様に謝意を表させていただきます。

[参考 URL]

文部科学省 G30 広報 HP

<http://www.uni.international.mext.go.jp/ja-JP/>

京都大学 K.U.PROFILE HP

<http://www.opir.kyoto-u.ac.jp/kuprofile/>

情報学研究科 国際コース HP

<http://www.g30.i.kyoto-u.ac.jp/>

表1 英語で行われている科目の延べ履修者数

専攻 \ 年度 学期	平成 22 後期	平成 23 前期	平成 23 後期	平成 24 前期	平成 24 後期	平成 25 前期	平成 25 後期	平成 26 前期	平成 26 後期
知能情報学専攻	62	101	90	135	72	116	63	150	72
社会情報学専攻	43	18	27	42	55	24	35	23	77
通信情報システム 専攻	36	30	51	88	47	86	62	53	27
上記以外の専攻	23	30	19	26	22	57	22	42	13
合計	164	179	187	291	196	283	182	268	186



表2 国際コースを修了したと認められた学生数

専攻 留学生・日本人の別		修了時期・課程		平成 24 年 9 月		平成 25 年 3 月		平成 25 年 9 月		平成 26 年 3 月		平成 26 年 10 月		平成 27 年 3 月	
		修士	修士	修士	博士 後期	修士	博士 後期	修士	博士 後期	修士	博士 後期	修士	博士 後期	修士	博士 後期
知能情報学専攻	留学生	2	9	2		10	1			1		2	3		
	日本人	1	1			4						3			
社会情報学専攻	留学生	2	3			5				3	2	3	3		
	日本人		1			1									
通信情報システム専攻	留学生		3	4		3				1	1	4	2		
	日本人		2			3						3	1		
合計	留学生	4	15	6		18	1			4	2	9	8		
	日本人	1	4			8						6	1		

## 同窓会イベント「超交流会 2014」の開催報告

京都大学大学院情報学研究科同窓会 会長 延原章平  
(知能情報学専攻 2005年博士修了)  
(知能情報学専攻 講師)

### 1. 超交流会とは？

超交流会とは同窓会主催の「オープンイベント」だ。元々は『同窓会総会』だったが、2009年に「誰でも参加できるオープンな交流イベント」として生まれ変わった。昨今では京大情報学研究科とは関係のない学生や社会人が参加者の約半数を占める。よって「京大情報学のOB達がお届けするお祭り」と説明する事もある。『ダイヤモンドオンライン』の取材記事には「自己増殖するコミュニティ」と紹介して頂いた。

※『大学は起業家に必要なものが揃うすごい土壤だ!』(2012年9月24日)



### 2. 超交流会 2014 報告

『超交流会 2014 ～みんなのチャレンジ～』は研究科共催のもと2014年6月7日に時計台にて開催され、石黒浩(阪大教授)、森本登志男(佐賀県庁最高情報統括監)など20名以上の登壇者による講演会と、29件のブース出展(うち21件は有料の法人出展)が行われ、盛況の内に閉会した。以下イベント開始直後からTwitter、Facebook、Blogなどで寄せられた参加者からの感想の一部を紹介する。

◆京大超交流会に参加! やっぱり京大の校風がイベントにも反映されていて面白い! 起業家質問会中。

◆超交流会楽しかった。今までの自分の人生とまったく接点のなかった世界とほんの少しすれ違った感覚。

◆超交流会を終えて帰りの新幹線です。色々面白い話を聞いた。個人的に話をした人達のトークも面白かったけど、一つ一つの講演の内容が良かった。聞いている最中に「この内容は聞き手に対する



要求が高いんじゃないか」って気にさせるところが京都っぽい、、、かな?

その他の感想などは是非次の URL から確認して頂きたい ⇒ <http://www.johogaku.net/sn2014/archives>

### 3. 今後の活動方針

本稿が読まれる頃には「超交流会 2015 ～みんなのアイオーテー～(仮)」(2015年6月13日[土])が既に開催されているはずである。ご参加頂いた方に感謝するとともに、参加できなかった方は是非次回ご参加頂きたい。京大情報学同窓会は「人脈形成」をキーワードに活動を続けていく。今後とも、京大情報学同窓会の活動に、ご支援いただければ幸いです。

## 招へい外国人学者等

氏名・国籍・所属・職	活動内容	受入期間・身分	受入教員
Bittner Emese ハンガリー セゲド大学 計算機科学博士課程学生	アルゴリズムと計算量理論に関する研究	外国人共同研究者 2014年4月1日～ 2014年6月20日	通信情報システム専攻 岩間 一雄 教授
Bremner David カナダ ニューブランズウィック大学 教授	Parallel computation for reverse search (並列計算で逆探索)	招へい外国人学者 2014年4月17日～ 2014年5月18日	通信情報システム専攻 David Avis 教授
Zhedanov Oleksiy ウクライナ ドネツク物理工科大学 上級研究員	数理物理および近似理論のアルゴリズム開発	招へい外国人学者 2014年5月1日～ 2014年7月31日	数理工学専攻 辻本 諭 准教授
Youssef Karim Ahmad レバノン ピエール・マリー・キュリー大学 博士課程学生	残響下でのロボットによる複数話者の同時話者認識と音源定位	外国人共同研究者 2014年7月8日～ 2015年7月7日	知能情報学専攻 吉井 和佳 講師
Boukhatem Lila フランス パリ第11大学 准教授	エコ HetNets 無線通信システムのためのクロスレイアプロトコル設計	招へい外国人学者 2014年5月30日～ 2014年6月24日	システム科学専攻 金子 めぐみ 助教
Shi Yiyu 中国 ミズーリ工科大学 助教	オンチップセンサに基づく実行時再構成機能を備える耐雑音故障VLSIアーキテクチャ	外国人共同研究者 2014年6月3日～ 2014年8月1日	通信情報システム専攻 佐藤 高史 教授
Burling Joseph アメリカ ヒューストン大学 Statistical Programing & Analysis 講師 Cognitive Development Labリサーチアシスタント 博士課程学生	EAPSI:Point of Gaze Estimation within a Behavioral Task Setting	外国人共同研究者 2014年6月19日～ 2014年8月20日	知能情報学専攻 西田 豊明 教授
Tiwary Hans Raj インド カレル大学 助教	幾何学計算	外国人共同研究者 2014年6月5日～ 2014年7月13日	通信情報システム専攻 David Avis 教授
Cleve Richard Erwin カナダ ウォータールー大学 教授	量子オラクル同定問題の研究	招へい外国人学者 2014年7月1日～ 2014年8月30日	通信情報システム専攻 岩間 一雄 教授
Li Yih-Lang 台湾 国立交通大学 教授	大規模集積回路の回路レイアウト統合設計	招へい外国人学者 2014年12月7日～ 2015年2月1日	通信情報システム専攻 小野寺 秀俊 教授

## 平成26年度 受託研究

受託研究課題	専攻名・職・氏名	委託者
コンテンツ共生社会のための類似度を可視化する情報環境の実現	知能情報学専攻 講師 吉井 和佳	独立行政法人 科学技術振興機構
超低電圧 LSI プラットフォーム開発及び実証アプリケーションチップ開発	通信情報システム専攻 教授 小野寺秀俊	超低電圧デバイス技術研究組合
日常生活バイタルモニタリングにおける融合コーパスを用いたヘルスケアサービスの構築	通信情報システム専攻 教授 佐藤 亨	独立行政法人 科学技術振興機構
日常生活バイタルモニタリングにおける融合コーパスを用いたヘルスケアサービスの構築	知能情報学専攻 教授 西田 豊明	独立行政法人 科学技術振興機構
日常生活バイタルモニタリングにおける融合コーパスを用いたヘルスケアサービスの構築	知能情報学専攻 教授 黒橋 禎夫	独立行政法人 科学技術振興機構
ロボット制御情報及び時空間地理情報の統合解析によるロボット制御最適化技術の開発と、移動支援機器・ナビゲーションシステムの開発	社会情報学専攻 教授 吉川 正俊	独立行政法人 科学技術振興機構
セミオートマチック最適治療計画支援システムの研究開発・実証	システム科学専攻 教授 松田 哲也	独立行政法人 科学技術振興機構
設計プロモーターの転写活性の測定	知能情報学専攻 講師 細川 浩	高機能遺伝子デザイン技術研究組合
情動の制御機構を解明するための神経情報基盤の構築（情動系神経情報基盤構築のための計算論的手法および実験動物の開発）	システム科学専攻 教授 石井 信	国立大学法人名古屋大学
ワイヤレス M2M 共通基盤の実現に向けたスマートメータ／スマートユーティリティネットワークの研究開発	通信情報システム専攻 教授 原田 博司	総務省
140GHz 帯高精度レーダーの研究開発	通信情報システム専攻 教授 佐藤 亨	総務省
次世代ブロードバンド通信システムの動向等に関する調査検討	通信情報システム専攻 教授 原田 博司	株式会社日立国際電気
クラウドソーシングによるビッグデータ解析・利用基盤技術の創出	知能情報学専攻 教授 鹿島 久嗣	独立行政法人 科学技術振興機構
ビアプログラマブル論理回路に関する研究	通信情報システム専攻 教授 小野寺秀俊	独立行政法人 科学技術振興機構
高周波数帯を活用する端末連携信号処理技術の研究開発	通信情報システム専攻 准教授 村田 英一	総務省
データ粒子の意味構造解析と機械学習	知能情報学専攻 教授 山本 章博	独立行政法人 科学技術振興機構
計算機・人の知を統合したビッグテキスト解析基盤	知能情報学専攻 准教授 河原 大輔	独立行政法人 科学技術振興機構

受託研究課題	専攻名・職・氏名	委託者
インタラクションの大規模結合による「学習場」の情報化	知能情報学専攻 講師 川嶋 宏彰	独立行政法人 科学技術振興機構
極限音響処理	知能情報学専攻 助教 糸山 克寿	独立行政法人 科学技術振興機構
地球環境情報統融合プログラム	社会情報学専攻 教授 吉川 正俊	国立大学法人東京大学 学長 代理人 国立大学法人 東京大学生産技術研究所
共同利用型公共無線システムに関する技術動向調査および基礎研究	通信情報システム専攻 教授 原田 博司	一般財団法人 電波技術協会

## 平成26年度 共同研究

研究題目等	専攻名・職・氏名	委託者
用例ベース機械翻訳の高度化・実用化のための開発研究	知能情報学専攻 教授 黒橋 禎夫	ヤフー株式会社
分散型蓄電池システムにおける状態推定および制御方式に関する研究	数理工学専攻 教授 山本 裕	パナソニック株式会社 R&D 本部
ノイズ解析に向けた電源 IC のモデリング技術の研究	通信情報システム専攻 教授 佐藤 高史	株式会社村田製作所
次世代通信ネットワーク向け品質制御技術の研究	通信情報システム専攻 教授 高橋 達郎	株式会社日立製作所中央研究所
スマート・バイオテレメトリー技術の開発	社会情報学専攻 教授 守屋 和幸	株式会社アクアサウンド
科学技術用語にかかる日中対訳辞書構築に関する研究	知能情報学専攻 教授 黒橋 禎夫	独立行政法人 科学技術振興機構
多言語間コミュニケーション支援に関する研究	社会情報学専攻 教授 石田 亨	日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所
超大容量光信号伝送のためのデジタル信号処理方式の研究	システム科学専攻 准教授 林 和則	非公開
アプリケーション特性のモデル化の研究	通信情報システム専攻 教授 高橋 達郎	日本電信電話株式会社 ネットワーク基盤技術研究所
需要家機器として蓄電池を統合したデマンドレスポンス技術に関する研究	知能情報学専攻 教授 松山 隆司	非公開
非公開	通信情報システム専攻 教授 守倉 正博	非公開
自由視点映像生成における撮影条件緩和に関する研究開発	知能情報学専攻 教授 松山 隆司	日本電信電話株式会社 NTT メディアインテリジェンス研究所
非公開	非公開	株式会社神戸製鋼所 技術開発本部 生産システム研究所
非公開	システム科学専攻 教授 加納 学	非公開
端末間連携に基づく協調送受信信号処理技術と無線リソース制御技術	通信情報システム専攻 准教授 村田 英一	株式会社 NTT ドコモ
非公開	知能情報学専攻 教授 山本 章博	非公開
非公開	知能情報学専攻 教授 熊田 孝恒	トヨタ自動車株式会社

研究題目等	専攻名・職・氏名	委託者
非公開	通信情報システム専攻 教授 守倉 正博	株式会社東芝研究開発センター
実環境理解、ロボット聴覚、音楽情報処理、人・機械インタラクション、音声対話及びこれらの展開に関する研究	知能情報学専攻 講師 吉井 和佳	株式会社ホンダ・インスティテュート・ジャパン
非公開	知能情報学専攻 教授 鹿島 久嗣	三菱電機株式会社
非公開	システム科学専攻 助教 平岡 敏洋	西日本高速道路エンジニアリング関西株式会社
非公開	通信情報システム専攻 教授 小野寺秀俊	非公開
非公開	システム科学専攻 教授 高橋 豊	株式会社日立製作所 横浜研究所
有機分子に関する合成可能性の情報学的検討	知能情報学専攻 教授 鹿島 久嗣	株式会社地球快適化インスティテュート
統計的プロセス管理技術に基づく高炉操業支援モデルの開発	システム科学専攻 教授 加納 学	新日鐵株式会社 技術開発本部 プロセス研究所
回路・システム研究開発：デバイスモデル／回路解析	通信情報システム専攻 教授 佐藤 高史	公益財団法人 京都高度技術研究所
UGC データの情報信憑性分析に関する研究	社会情報学専攻 教授 田中 克巳	ヤフー株式会社
セキュアなクラウド型データセンターシステムの研究	数理工学専攻 教授 梅野 健	パテネット株式会社
知的情報処理の基盤となる事態間反義・矛盾知識の自動構築に関する研究	知能情報学専攻 教授 黒橋 禎夫	日本電信電話株式会社 NTTメディアインテリジェンス研究所
モバイル環境を考慮した検索技術の開発	社会情報学専攻 教授 田中 克巳	株式会社デンソーアイティ ラボラトリ
省エネ行動を促進のための無意識化レベル（習慣化）の研究	知能情報学専攻 教授 熊田 孝恒	東京瓦斯株式会社
非公開	通信情報システム専攻 准教授 山本 高至	非公開
クラウドオフィス文書のアクセス環境に関する研究	社会情報学専攻 教授 田中 克巳	シャープ株式会社
ヒートポンプ給湯機（エコキュート）の蓄エネルギー制御に関する研究	知能情報学専攻 教授 松山 隆司	ダイキン工業株式会社
非公開	システム科学専攻 助教 藤原 幸一	非公開

研究題目等	専攻名・職・氏名	委託者
Wi-SUNを活用した高齢者対策システムの研究開発	通信情報システム専攻 教授 原田 博司	東日本電信電話株式会社
確率的挙動を含むハイブリッドシステムの設計検証手法とその応用	通信情報システム専攻 准教授 末永 幸平	非公開
ユーザ行動に基づくモバイルトラフィック制御技術の研究	通信情報システム専攻 准教授 新熊 亮一	非公開



## 平成26年度 科学研究費補助金

研究種目	審査区分	研究代表者	研 究 課 題
基盤研究 (S)		石田 亨	マルチエージェントモデルに基づく持続可能な言語サービス基盤の世界展開
基盤研究 (A)	一 般	田中 克己	ウェブ検索の意図検出と多元的検索意図指標にもとづく検索方式の研究
	一 般	西田 豊明	人間・エージェントの円滑で確実な意思疎通のためのコミュニケーション基盤
	一 般	岩間 一雄	データの巨大化から生じる不完全情報への対処に主眼をおいた近似計算
	一 般	佐藤 亨	UWB レーダードップラー分離干渉計法による人体の高次モニタリング
	一 般	杉江 俊治	超解像制御：アクチュエータとセンサの限界を超える制御
	一 般	水原 啓暁	神経振動子の位相リセットによる音声コミュニケーション原理
	一 般	延原 章平	アクアビジョン：カメラ・プロジェクタ群が形成する水中光線空間のモデル化とその応用
基盤研究 (B)	一 般	Avis David(補助金) Avis David(基金分)	幾何計算アプローチによる計算困難な最適化問題の求解：理論的基盤と実装
	一 般	高木 直史(補助金) 高木 直史(基金分)	データ表現の工夫による高性能・高信頼浮動小数点演算器アレイに関する研究
	一 般	黒橋 禎夫(補助金) 黒橋 禎夫(基金分)	多様なテキストへの高次アノテーションに基づく文脈理解モデルの明確化
	一 般	石井 信(補助金) 石井 信(基金分)	ブレインデコーディングに基づくヒト意思決定過程の神経基盤の解明
	一 般	松田 哲也(補助金) 松田 哲也(基金分)	タギング MRI による画像分解能以下の微細変動計測法の開発
	一 般	中村 佳正(補助金) 中村 佳正(基金分)	大規模スパース行列の高速特異値分解法の開発とその実装コード公開
	一 般	守倉 正博(補助金) 守倉 正博(基金分)	数万端末競合環境を実現するバッテリーレス M2M ネットワーク
	一 般	山本 裕(補助金) 山本 裕(基金分)	サンプル値制御理論による非定常信号のシステム理論とその応用
	一 般	小野寺秀俊(補助金) 小野寺秀俊(基金分)	自律的特性補償により閾値付近の低電圧まで安定動作する集積回路設計技術
	一 般	五十嵐 淳(補助金) 五十嵐 淳(基金分)	ソフトウェア契約に基づく高階型付プログラムの理論
	一 般	佐藤 雅彦(補助金) 佐藤 雅彦(基金分)	クラス理論に基づく自己拡張可能なソフトウェア検証体系の構築
	一 般	磯 祐介(補助金) 磯 祐介(基金分)	数値解析・応用数学的アプローチによる高解象光トモグラフィ実現のための基礎研究
	一 般	大塚 敏之(補助金) 大塚 敏之(基金分)	大規模非線形時空間パターン制御の実時間最適化アルゴリズムと応用
	一 般	石原 亨(補助金) 石原 亨(基金分)	環境発電技術を用いた社会に溶け込むコンピューティング基盤の研究
	一 般	佐藤 高史(補助金) 佐藤 高史(基金分)	寿命予測・障害予防・修復を可能とする集積回路の信頼性設計手法
	一 般	山肩 洋子(補助金) 山肩 洋子(基金分)	消費者生産型レシピコンテンツの手順・記述から見た多様性の解析手法の提案

研究種目	審査区分	研究代表者	研究課題
基盤研究(B)	一般	中澤 篤志(補助金) 中澤 篤志(基金分)	角膜イメージング法を用いた周辺視野計測手法
	一般	川嶋 宏彰(補助金) 川嶋 宏彰(基金分)	合意形成の内的過程を考慮したターンテイキングのタイミング生成機構
	一般	山本 章博(補助金) 山本 章博(基金分)	順序関係が成立する属性を持つデータからの閉集合を用いた知識発見
	一般	田島 敬史(補助金) 田島 敬史(基金分)	大規模グラフストリームからのリアルタイム情報抽出基盤
	一般	高橋 豊(補助金) 高橋 豊(基金分)	コンテキストウェア・ネットワークウェア WBAN に関する研究
	一般	木上 淳(補助金) 木上 淳(基金分)	フラクタルにおける代数的・幾何学的構造と解析の相互的な関わりに関する研究
	一般	加嶋 健司(補助金) 加嶋 健司(基金分)	確率ゆらぎと相互作用し機能する制御系の設計論:不変測度解析と応用
基盤研究(C)	一般	山口 義幸	非相加系のダイナミクスと熱力学
	一般	太田 快人	構造を有するシステム同定問題へのロバスト制御理論からの取り組み
	一般	高木 一義	先端デバイスを用いた論理回路の高信頼化タイミング設計手法の研究
	一般	林 和則	仮想回り込み経路を用いた自己干渉除去とその応用に関する研究
	一般	永原 正章	信号のスパース表現にもとづくネットワーク化制御系での高効率情報伝送
	一般	加納 学	原料や装置特性の変化および不確定性を考慮した仮想計測技術の開発
	一般	山下 信雄	凸計画問題に対する近接座標勾配法の計算量解析と設計指針の体系化
	一般	高橋 達郎	30年後の同期型交換網のための研究
	一般	五十嵐 顕人	ネットワーク上での情報通信経路の最適化
	一般	佐藤 彰洋	経済社会データおよび環境データを用いた次世代航空機ネットワーク構造の最適化
	一般	船越 満明	速度場の構造・特徴に基づく流体混合効率指標の数理的解析
	一般	辻本 諭	離散可積分系による古典直交多項式の理論とその応用
	一般	乗松 誠司	自己/相互位相変調効果の光受信機における補償法の開発
	一般	小林 慎治	診察情報の意味論的解析を行う自律エージェントアルゴリズムの研究
	一般	玉置 卓	制約充足問題に対する効率の良い厳密および近似アルゴリズムの研究
	一般	永持 仁	グラフ最適化問題に対する高速アルゴリズムの理論設計と実装開発
	一般	吉仲 亮	分布学習に基づく自然言語文とその意味表現の対からなる形式言語の学習に関する研究
	一般	笹岡 貴史	物体の外観の能動的探索による物体認知促進メカニズムの解明
	一般	岩井 敏洋	幾何学的力学系理論の展開と量子系のトポロジー
	挑戦的萌芽研究		西田 孝明
		藤原 宏志	第一種積分方程式の直接解析による逆問題の高精度計算の新展開
		原田 健自	テンソルネットワークを用いたフラストレート量子スピン系の非磁性相の数値的研究
		西田 豪	非線形 $H^\infty$ 出力フィードバック制御問題の数値解法
		友枝 謙二	サポートの分離・併合から見た界面ダイナミクスに対する数値解析
		矢ヶ崎一幸	微分方程式系における多様な分岐構造の解明
		田島 敬史	木構造データの複数パラダイム混在処理方式に関する研究
	前川 真吾	透明ディスプレイへの応用を目指したイカ色素胞制御機構の解明	
	乾 敏郎	催眠技術による幻覚・妄想の神経機構の解明	

研究種目	審査区分	研究代表者	研 究 課 題
挑戦的萌芽研究		延原 章平	多重鏡映像による仮想多視点カメラ環境を用いた高精度全周囲3次元形状推定
		Cuturi Marco	Empirical Bayes Kernels: Unsupervised Kernel Learning
		細川 浩	感情の可視化
		河原 大輔	Web コンテンツのメタデータ自動付与に基づくシンボルグラウンディング
		高橋 豊	スマートグリッドにおけるAMIに関する研究
		磯 祐介	温度効果を考慮した亀裂進展の数値モデルの提案と解析
		大塚 敏之	非線形システムの解析と制御に対する可換環論的アルゴリズム
		荒牧 英治	テキストの安全な匿名化に関する研究
		石原 亨	ニアスレッショルド電圧動作に適したオンチップメモリの研究
		嶋吉 隆夫	反復型数値解法の宣言的記述による形式手法
		熊田 恒孝	実用性知能の脳内基盤に関する研究
		川嶋 宏彰	力学系と離散事象系の二重化相互作用に基づく群行動のモデル化と制御
		浦久保秀俊	脳の記憶メカニズムに基づいた生体分子メモリシステムの実用化
		田島 敬史	メッセージストリームの効率的閲覧のためのユーザインタフェース
		木上 淳	測度・距離空間上の解析学の展開に向けてー Cheeger 理論とフラクタル
		村田 英一	Massive MIMO による伝搬路制御型ビームフォーミング
		加嶋 健司	大規模非負システム制御理論に基づく映像投影システムの設計論
		大手 信人	安定同位体比情報を用いた森林土壌中の総硝化量の原位置推定
研究活動スタート支援		西尾 理志	LED とカメラで超える無線 LAN 通信容量の限界
		藤井 啓祐	スケーラブル量子情報処理のための新奇制御法の構築
		中嶋 浩平	流体計算機の構想
若手研究 (A)		大島 裕明(補助金)	意味的に周辺にあるウェブ情報へのナビゲーションの研究
		大島 裕明(基金分)	
		中尾 恵(補助金)	拡張内視鏡イメージング-構造・力学特性を反映した三次元画像と実世界の融合
		中尾 恵(基金分)	
		東 俊一(補助金)	マルチエージェントシステムに対するブロードキャスト制御技術の確立
		東 俊一(基金分)	
		馬 強(補助金)	エンティティマイニングに基づく情報補完機構に関する研究
		馬 強(基金分)	
		小山 里奈(補助金)	北方林の植物の窒素獲得戦略：冬季における窒素同化とそのエネルギー源に関する研究
		小山 里奈(基金分)	
		三田村啓理(補助金)	広帯域超音波受信テレメトリーによる沿岸魚類の固執・回帰行動研究 — 個体から個体群へ
		三田村啓理(基金分)	
		Cuturi Marco(補助金)	Fast Optimal Transport and Applications to Inference and Simulation in Large Scale Statistical Machine Learning
		Cuturi Marco(基金分)	
	加藤 誠(補助金)	潜在的情報を引き出すための情報誘出技術に関する研究	
	加藤 誠(基金分)		
	吉井 和佳(補助金)	信号処理と記号処理の確率的協働による音楽知能の創発	
	吉井 和佳(基金分)		
	鹿島 久嗣(補助金)	グラフ構造データの予測的分析のための機械学習手法の研究	
若手研究 (B)		金子めぐみ	フェムトセル・マクロセル共存環境での無線資源割当てに関する研究
		山肩 洋子	調理をしながら調理法を説明した音声からのレシピテキストの自動生成
		上野 賢哉	劣加法構造探索による計算理論の新展開

研究種目	審査区分	研究代表者	研 究 課 題	
若手研究 (B)		中澤 巧爾	ストリーム計算のための計算モデル	
		馬谷 誠二	アンビエント計算に基づく実用的かつ信頼性の高い分散プログラム開発環境	
		糸山 克寿	統計的機械学習による音楽情景分析と音楽的要素のディレクションの研究	
		増山 博之	相関構造をもつ待ち行列モデルと集合的リスクモデルの漸近解析	
		大関 真之	非平衡関係式を駆使した最適化と制御の情報統計力学	
		末永 幸平	無限小プログラミングによるハイブリッドシステムの形式検証手法	
		新熊 亮一	自然エネルギー発電と通信制御の統合システムの研究	
		梁 雪峰	Salient motion decomposition using potential surface in high dimensional space	
		西出 俊	スパース結合再帰神経回路モデルを用いたロボットによる道具身体化モデルの構築	
		今井 宏彦	超偏極キセノン磁気共鳴イメージングによる新規生体情報計測法の開発	
		大木健太郎	量子通信を用いたネットワーク化制御に関する研究	
		丸田 一郎	ノンパラメトリック区分的線形モデルに基づく制御手法の構築	
		大久保 潤	代数的確率論に基づく細胞内反応時系列データ解析手法の開発	
		瀧 宏文	乳がんスクリーニングのための超音波を用いた微小石灰化検出	
		大本 義正	タスク遂行における重視要因順位の協調的な推測・形成手法の開発と評価	
		福田 秀美	非線形2次錐計画問題と非線形半正定値計画問題の方法と応用	
		廣本 正之	画像認識向けニューラルネットワークプロセッサの研究	
		新納 和樹	境界要素法による周期電磁波動散乱問題の高精度、高速な数値解法の開発	
		金子めぐみ	無線制御通信システムのためのプロトコル設計	
		近藤 洋平	集団運動する細胞組織の力学特性の推定	
	高瀬 英希	環境エネルギーで動作する組み込みシステムのスケラビリティ管理プラットフォーム		
	藤原 幸一	迷走神経刺激療法有効性事前判定のためのてんかん発作軽減効果予測手法の開発		
	糸 直人	深さ情報付き手術画像による可触型の術中止血訓練用バーチャルリアリティシミュレータ		
新学術領域研究 (研究領域提案型)	計画研究	石井 信	多次元データに基づくメゾ回路のシステム同定法の開発	
	計画研究	Avis David	大規模数値計画による計算限界解析法の展開	
	公募研究	東 俊一	分子デバイスで実現可能な確率制御器のモデル化と解析設計手法の確立	
	公募研究	青柳富誌生	複数のリズムを内在する神経ネットワークの推定手法の開発と機能的意味の検証	
	公募研究	乾 敏郎	ダイナミックな相互作用を通じた身体的表象からの分離表象への発達原理と発達障害の理解	
	計画研究	田中 利幸	圧縮センシングにもとづくスパースモデリングへのアプローチ	
	公募研究	鹿島 久嗣	機械学習に基づく材料探索技術の開発	
	公募研究	水原 啓暁	コミュニケーションの時間窓を決定する周期的脳活動	
	公募研究	永原 正章	スパース最適制御理論によるバイオメカニクスのためのスパースモデリング	
特別研究員費 奨励費		田中 克	佃 洸撰	典型度に基づく Web オブジェクト検索に関する研究
		守 屋	西澤 秀明	八重山地方におけるウミガメ類の行動圏に基づく保全に関する研究
		中 村	石上 裕之	スパコン向け高速・高精度な部分特異値分解ソルバの開発と公開
		山本 裕	若生 将史	安定なコントローラによる分布定数系の H 無限大制御
		佐藤 高	栗野 皓光	微細 MOS トランジスタにおける RTN 起因の特性ばらつきに関する研究
		梅 野	小川 駿	非平衡状態に対する遷移線形化の手法による非線形応答理論
		松 山	石川恵理奈	提示コンテンツのデザイン構造を用いた視線運動の意味理解
		石 井	森岡 博史	混雑実環境におけるヒトの自己位置同定法の NIRS・EEG 計測による計算論的解明
		田 島	真鍋 知博	ブロックレベル Web ページ検索の研究

研究種目	審査区分	研究代表者	研 究 課 題
特別研究員 奨励費	田中克	梅本 和俊	ユーザの行動モデルに基づく検索意図推定に関する研究
	小野寺	イスマ マーフズル	特性ばらつきの自律補償技術とそれを活用したLSIの低消費電力化手法に関する研究
	守屋	亀山 紗穂	海洋生物の鳴音による遠隔的な観察手法の開発と応用： 洋上風力発電施設の影響評価
	五十嵐	対馬かなえ	型デバッグの理論と実際
	黒橋	チョシンキ	日中機械翻訳の実用化を目指した対訳資源の段階的自動構築
	西村	三澤 亮太	板波散乱解析に対する Green 函数を用いた境界積分方程式法の高速化について
	木上	伊藤 悠	ラフパス解析の分数階微積分に基づく研究
	山本	大滝 啓介	グラフのデータ生成モデルに基づく知識発見手法とその可視化手法
	岩間	長尾 篤樹	対数領域計算モデルの計算限界の解明
	中村	赤岩 香苗	可積分な固有値計算アルゴリズムによる重複固有値計算の漸近解析
	鹿島	則 のぞみ	ハイパーグラフを用いた多項関係の学習・予測手法の提案と情報抽出・ 検索への応用
外国人特別研究員 奨励費	西田	MOHAMMAD, Y. F.	ハイブリッドインタラクティブロボットアーキテクチャを用いた可 塑的な模倣学習
	西田	SONG, H	対人インタラクションにおけるロボットの行動ポリシーの情動感応 的知的プランナー
	山本	SYRJALA Ville Antero	全二重通信機のための RF 不整合の解析と DSP による緩和

## 平成26年度 特別講演

番号	開催日	曜日	主催	講師	講演題目
1	4月3日	木	システム科学	東京大学大学院 研究員 朱 洪忠	Smooth Output Reconstruction for Linear System with Quantized Measurements
2	4月28日	火	知能情報学	ETRI Senior Research Engineer 朴 惠宣	Recent Research Activities Introduction
3	5月7日	水	社会情報学	株式会社Preferred Infrastructure・ リサーチャー 比戸 将平	機械学習帝国の繁栄とニューラルネットの逆襲
4	5月23日	金	数理工学	富士通株式会社・キュレーター 小副川 健	ビジネスの現場におけるビッグデータ分析
5	6月2日	月	システム科学	理化学研究所 脳科学総合研究所 神経適応理論チーム 研究員 島崎 秀明	情動の制御機構を解明するための神経情報 基盤の構築
6	6月3日	火	システム科学	鳥取大学 准教授 原 豊	JST CREST EMS RTP チームセミナー
7	6月6日	金	システム科学	パリ第11大学 准教授 Lila Boukhatem	Mobility Aware Interference Mitigation in Heterogeneous Networks (異種ネットワーク環 境におけるモビリティを意識した干渉補償法)
8	6月13日	金	社会情報学	Senior Researcher/IBM Research India ACM Distinguished Scientist Mukesh Mohania	Big Data Analytics for Personalized Education
9	6月16日	月	知能情報学	大阪大学 産業科学研究所 知能推論研究分野(鷺尾研究室) 助教 杉山 磨人	情報学展望 4
10	6月23日	月	知能情報学	国立情報学研究所 社会共有知研究センター 特任准教授 松崎 拓也	自然言語理解に基づく大学入試問題回答へ のチャレンジ
11	7月1日	火	社会情報学	株式会社オピニオン・代表取締役 (京都大学経営管理大学院・特別教授) 碓井 誠	IT の進化と IT 活用の新しい流れ
12	7月4日	金	知能情報学	エディンバラ大学 准教授 幸村 琢	Animating close interaction
13	7月11日	金	知能情報学	ヒューストン大学 准教授 吉田 華子	Exploring the Social Role in Infants' Visual Experiences
14	7月30日	水	システム科学	Duke 大学工学部電気・ コンピュータ工学科 教授 Kishor Trivedi	Capacity Planning for Infrastructure-as-a- Service Cloud (クラウドサービス基盤の キャパシティ設計)
15	11月21日	金	数理工学	神戸大学大学院 システム情報学研究科 准教授 澤 正憲	Cubature 公式, Hilbert 恒等式, 最適実験計画
16	11月21日	金	システム科学	大阪大学 准教授 宮本 俊幸	JST CREST EMS RTP チームセミナー 第5回
17	11月26日	水	社会情報学	東京工業大学大学院 情報理工学研究科 教授 小池 英樹	Vision-based HCI: Interactive Surfaces and Digital Sports
18	11月28日	金	知能情報学	株式会社富士通研究所 研究員 丸橋 弘治	テンソル分解を用いたデータ解析技術の チュートリアルとその異常検知への適用を 含む応用研究事例についての講演を行う

番号	開催日	曜日	主催	講師	講演題目
19	2月2日	月	数理工学	National Research University Higher School of Economics 教授 Anton Zabrodin	Spectra of quantum magnets via integrable many-body systems of classical mechanics
20	2月24日	火	知能情報学	独立行政法人理化学研究所 理研 BSI-トヨタ連携センター 研究員 井関 龍太	分散分析の基本とアプリケーション (ANOVA 君) の使い方
21	3月21日 および 3月23日	土 月	数理工学	情報通信研究機構 総括主任研究員 澤井 秀文	国際ワークショップ“Exploring complex socio-techno-environmental systems across the boundary”において“Multi-Objective Optimization for Resilient Airline Networks Using Socioeconomic-Environmental Data”の招待講演を行う

## 博士学位授与

【 】内は論文調査委員名

◎平成26年5月23日付京都大学博士（情報学）の学位を授与された者

## [博士課程修了によるもの]

後 藤 功 雄

Word Reordering for Statistical Machine Translation via Modeling Structural Differences between Languages（統計的機械翻訳のための言語構造の違いのモデル化による語順推定）

【黒橋禎夫・田中克己・河原達也】

李 濼

Common-Near-Neighbor Information in Discriminative Spaces for Human Re-identification（人物照合のための識別空間中での共通近傍情報）

【美濃導彦・河原達也・中村裕一】

◎平成26年7月23日付京都大学博士（情報学）の学位を授与された者

## [博士課程修了によるもの]

森 本 尚 之

Design and Analysis of Algorithms for Graph Exploration and Resource Allocation Problems and Their Application to Energy Management（グラフ探索および資源割当アルゴリズムの設計と解析ならびにそのエネルギー管理への応用）

【岡部寿男・松山隆司・阿久津達也】

溝 端 紀 子

人間活動がジェゴンに与える影響に関する音響学的研究

【守屋和幸・荒井修亮・小山里奈】

Mirza Golam Kibria

Radio Resource Allocation Optimization for Cellular Wireless Networks（セルラワイヤレスネットワークにおける無線資源割当最適化）

【守倉正博・村田 英一・梅野 健】

◎平成26年9月24日付京都大学博士（情報学）の学位を授与された者

## [博士課程修了によるもの]

西 野 正 彬

Numerical Optimization Methods based on Discrete Structure for Text Summarization and Relational Learning（文書要約と関係学習のための離散構造に基づいた数値最適化法）

【山本章博・黒橋禎夫・阿久津達也】

吉 野 幸 一 郎

Spoken Dialogue System for Information Navigation based on Statistical Learning of Semantic and Dialogue Structure（意味・対話構造の統計的学習に基づく情報案内のための音声対話システム）

【河原達也・黒橋禎夫・鹿島久嗣】

石 群

Action History Volume for Spatiotemporal Editing of 3D Video in Multi-party Interaction Scenes（複数人物インタラクションシーンにおける Action History Volume を用いた3次元ビデオの時空間編集）

【松山隆司・美濃導彦・中澤篤志・延原章平】

倉 島 健

ソーシャルメディアデータからの体験マイニングに関する研究

【田中克己・石田 亨・西田豊明】

佃 洸 撰

A Study on Web Search and Analysis based on Typicality（典型性に基づく Web 検索と分析に関する研究）

【田中克己・吉川正俊・黒橋禎夫】

孫 英 英

Action Research to Promote Tsunami Risk Reduction: Ethnographic Approaches to Disaster Education and Tsunami Evacuation（津波防災のためのアクションリサーチ：防災教育と津波避難対策の充実化を目指した研究）

【矢守克也・多々納裕一・永田素彦】

陳 偉

Detection of forest disturbance and recovery after a serious fire in the Greater Hinggan Mountain area of China based on remote sensing and field survey data（中国大興安嶺における大規模火災がもたらした森林攪



乱と回復過程：リモートセンシングと現地調査による検出)

【守屋和幸・吉川正俊・小山里奈】

## 蔣 新 宇

A Methodology for Assessment of Spatial Distribution of Flood Risk (洪水災害リスクの空間分布の評価に関する方法論的研究)

【多々納裕一・矢守克也・堀 智晴】

## Aleksandar Shurbevski

An Approximation Framework for Sequencing Problems with Bipartite Structure (二部分構造を持つ順序付け問題に対する近似方式)

【永持 仁・太田快人・高橋 豊】

## 河 合 直 聡

マルチグリッド法に基づく高性能ポアソンソルバに関する研究

【中島 浩・中村佳正・石井 信】

## 布 房 夫

Quality-of-Service Control Scheme for Wireless Local Area Networks (無線ローカルエリアネットワークにおける通信品質制御方式の研究)

【守倉正博・高橋達郎・梅野 健】

## 新 谷 道 広

デバイス特性推定に基づく集積回路の適応型テストに関する研究

【佐藤高史・小野寺秀俊・高木直史】

◎平成27年1月23日付京都大学博士(情報学)の学位を授与された者

### [博士課程修了によるもの]

## 長谷川 嵩 矩

Reconstructing Biological Systems Incorporating Multi-Source Biological Data via Data Assimilation Techniques (データ同化手法を用いた多種生体内データの統合による生体内システム再構築の研究)

【阿久津達也・鹿島久嗣・石井 信】

## 須 藤 克 仁

A Japanese-to-English Statistical Machine Translation System for Technical Documents (技術文書に対する日英統計的機械翻訳システム)

【河原達也・黒橋禎夫・鹿島久嗣・森 信介】

## 仲 嶋 な つ

Genetic Network Completion Using Dynamic Programming and Least-Squares Fitting(動的計画法と最小二乗法を用いた遺伝子ネットワーク補完)

【阿久津達也・山本章博・岡部寿男】

◎平成27年3月23日付京都大学博士(情報学)の学位を授与された者

### [博士課程修了によるもの]

## 前 澤 陽

Bayesian Music Alignment (ベイズ推定に基づく音楽アライメント)

【河原達也・田中利幸・吉井和佳・奥乃 博】

## 楮 晨 翠

Integrated Parallel Data Extraction from Comparable Corpora for Statistical Machine Translation (統計的機械翻訳におけるコンパラブルコーパスからの対訳データの統合的抽出)

【黒橋禎夫・石田 亨・河原達也】

## 上 地 理 沙

Modeling of Biological and Economical Phenomena Based on Analysis of Nonlinear Competitive Systems (非線形競合システム解析に基づく生命と経済現象のモデル化)

【阿久津達也・西田豊明・山本章博】

## 阮 佩 穎

Computational Methods for Analyzing Protein Complexes and Protein-Protein Interactions (タンパク質複合体および相互作用の情報解析手法)

【阿久津達也・山本章博・鹿島久嗣】

## Lala, Divesh

The design and implementation of dynamic interactive agents in virtual basketball (仮想バスケットボールにおける動的インタラクティブエージェントの設計と実装)

【西田豊明・乾 敏郎・河原達也】

## 張 翠 翠

Quad-Tree based Image Encoding Methods for Data-Adaptive Visual Feature Learning (データ適応型特徴学習のための四分木に基づく画像の構造的表現法)

【松山隆司・美濃導彦・梁 雪峰】

## 魯 巍

Integer Programming-based Methods for Computing Minimum Reaction Modifications of Metabolic Networks for Constraint Satisfaction (代謝ネットワーク

クの最小反応修正による制約充足のための整数計画法を用いた計算手法)

【阿久津達也・岡部寿男・鹿島久嗣】

### 玉 置 哲 也

交通機能損傷を考慮した総合的災害リスク管理に関する研究

【多々納裕一・畑山満則・松原繁夫】

### 三 宅 英 知

対応経験を活用した避難対策と災害対応計画策定手法に関する研究

【林 春男・田中克己・喜多 一】

### 呉 麗 慧

Earthquake Disaster Preparedness for Tourism Industry in Japan and China (地震災害に対する日本と中国の観光産業での備え)

【林 春男・田中克己・喜多 一】

### 李 勇 昕

災害復興過程における被災地住民主体のコミュニケーションに関する研究 —日本と台湾の事例を通じて—

【矢守克也・多々納裕一・喜多 一】

### 買日旦 吾守爾

Pivot-Based Bilingual Dictionary Creation for Low-Resource Languages (低資源言語のためのピボット型対訳辞書生成)

【石田 亨・吉川正俊・河原達也】

### 竹之内 健 介

地域気象情報を通じた災害リスクコミュニケーション

【矢守克也・多々納裕一・中北英一】

### 莊 司 慶 行

A Study on Social Information Search and Analysis on the Web by Diversity Computation (多様性計算に基づくウェブ上のソーシャル情報の検索と分析に関する研究)

【田中克己・吉川正俊・黒橋禎夫】

### 江 欢 (JIANG HUAN)

Designing Incentive for Cooperative Problem Solving in Crowdsourcing (クラウドソーシングにおける協調問題解決のためのインセンティブ設計)

【松原繁夫・田島敬史・鹿島久嗣】

### 伊 藤 悠

Rough path theory via fractional calculus (非整数階微積分によるラフパス理論)

【木上 淳・磯 祐介・西村直志】

### 山 川 雄 也

Studies on Optimization Methods for Nonlinear Semidefinite Programming Problems (非線形半正定値計画問題に対する最適化手法の研究)

【山下信雄・太田快人・永持 仁】

### 花 小 琴

Studies on block coordinate gradient methods for nonlinear optimization problems with separable structure (分離可能な構造をもつ非線形最適化問題に対するブロック座標勾配法の研究)

【山下信雄・中村佳正・田中利幸】

### 泉 晋 作

Studies on Controller Networks (制御器ネットワークに関する研究)

【杉江俊治・太田快人・大塚敏之・東 俊一】

### Mohd Ashraf bin Ahmad

Model-Free Controller Design based on Simultaneous Perturbation Stochastic Approximation (同時摂動確率近似に基づくモデルフリー型制御器設計)

【杉江俊治・石井 信・加納 学・東 俊一】

### 森 岡 博 史

Analysis Methods toward Brain-Machine Interfaces in Real Environments (実環境 BMI に向けた解析法に関する研究)

【石井 信・田中利幸・加納 学】

### 仙 波 和 樹

実応用電磁界有限要素解析のための高性能線形ソルバに関する研究

【中島 浩・中村佳正・石井 信】

### 井 上 保 彦

Efficient Access Control Techniques for Distributed Wireless Communication Networks (分散型無線通信ネットワークのための高効率アクセス制御技術)

【守倉正博・高橋達郎・梅野 健】

### 長 尾 篤 樹

Computational Complexity of Tree Evaluation Problems and Branching Program Satisfiability Problems (木構造関数値評価問題と分岐プログラム充足性問題に対する計算複雑さ)

【岩間一雄・高木直史・五十嵐淳】

### 平 松 淳

高速パケット通信網の通信品質制御方式に関する研究

【高橋達郎・守倉正博・高橋 豊】

**松 原 大 典**

Studies on Information Sharing using Peer-to-Peer Systems and Information-Centric Networking (P2P システムおよび ICN による情報共有に関する研究)  
【高橋達郎・守倉正博・高橋 豊】

**[論文提出によるもの]****鍵 屋 一**

基礎自治体における防災・減災マネジメントの研究  
【林 春男・田中克己・牧 紀男】

**劉 巍**

Cooperative Resource Sharing in Mobile Cloud Computing (モバイルクラウドコンピューティングにおける協調的資源共有)  
【高橋達郎・原田博司・梅野 健】

**Kornyanat Watthanasangmechai**

Ionospheric study based on total electron content observations in Southeast Asia (東南アジアにおける全電子数観測に基づく電離圏研究)  
【山本 衛・津田敏隆・佐藤 亨】

**西 澤 真 一**

集積回路のエネルギー効率向上を目指した性能ばらつき予測技術とセルライブラリの構築に関する研究  
【小野寺秀俊・高木直史・佐藤高史】

**坂 本 健 一**

パケット通信による高信頼・高品質ネットワークの実現方式の研究  
【高橋達郎・佐藤 亨・原田博司】

**今 川 隆 司**

ソフトエラー耐性を考慮した粗粒度再構成可能アーキテクチャの設計手法  
【佐藤高史・小野寺秀俊・高木直史】

**松 本 高 士**

Impact of Bias Temperature Instability and Random Telegraph Noise on CMOS Logic Circuits (バイアス温度不安定性とランダムテレグラフノイズが CMOS 論理回路特性に及ぼす影響)  
【小野寺秀俊・高木直史・佐藤高史】

**新 田 高 庸**

Motion Estimation and Compensation Hardware Architecture with Hierarchy of Flexibility in Video Encoder LSIs (映像符号化 LSI における階層的な柔軟性をもつ動き検出/動き補償ハードウェア・アーキテクチャ)  
【佐藤高史・小野寺秀俊・高木直史】

**久保木 猛**

巻き込み型インダクタを用いた CMOS レーザダイオードドライバ回路の研究  
【小野寺秀俊・佐藤 亨・佐藤高史】

## 入学状況

平成27年度

H27.4現在

区分 専攻名	修士課程		博士後期課程	
	入学定員	入学者数	入学定員	入学者数
知能情報学	37	42(3)	15	9(3)
社会情報学	36	30(5)	14	11(3)
複雑系科学	20	20(0)	6	2(0)
数理工学	22	25(3)	6	6(3)
システム科学	32	36(3)	8	7(1)
通信情報システム	42	36(4)	11	4(0)
合計	189	189(18)	60	39(10)

( )内は外国人留学生で内数

## 修了状況

平成26年度修士課程修了者数

専攻名	修了者数
知能情報学	35
社会情報学	37
複雑系科学	17
数理工学	23
システム科学	41
通信情報システム	41
合計	194

## 荣誉・表彰

平成26年度科学技術分野の文部科学大臣  
表彰科学技術賞

平成26年4月15日  
佐藤 亨 教授（通信情報システム）  
南極大型大気レーダの開発における業績に対して

平成27年度科学技術分野の文部科学大臣  
表彰科学技術賞

平成26年4月15日  
原田 博司 教授（通信情報システム）  
世界標準スマートメータ用無線機の開発における業績に対して

IEICE 通信ソサイエティ  
BEST TUTORIAL PAPER AWARD

平成26年5月12日  
林 和則 准教授（システム科学）  
「A User's Guide to Compressed Sensing for Communications Systems」の論文に対して

IEICE 通信ソサイエティ  
BEST TUTORIAL PAPER AWARD

平成26年5月12日  
田中 利幸 教授（システム科学）  
「A User's Guide to Compressed Sensing for Communications Systems」の論文に対して

---

IEICE 通信ソサイエティ  
BEST TUTORIAL PAPER AWARD

---

平成 26 年 5 月 12 日  
永原 正章 講師 (複雑系科学)  
「A User's Guide to Compressed Sensing for Communications Systems」の論文に対して

---

自動車技術会 第 64 回 (2014 年)  
自動車技術会賞・論文賞

---

平成 26 年 5 月 22 日  
平岡 敏洋 助教 (システム科学)  
「自発的な行動変容を促す安全運転評価システム (第 1 報) (第 2 報)」の論文に対して

---

2014 年度システム制御情報学会 学会賞論文賞

---

平成 26 年 5 月 22 日  
杉江 俊治 教授 (システム科学)  
「分散制御によるロボットマスゲーム」の論文に対して

---

2014 年度システム制御情報学会 学会賞論文賞

---

平成 26 年 5 月 22 日  
東 俊一 准教授 (システム科学)  
「分散制御によるロボットマスゲーム」の論文に対して

---

近畿情報通信協議会会長表彰

---

平成 26 年 6 月 1 日  
村田 英一 准教授 (情報通信システム)  
LAN システムのデータ送受信の広帯域化の基盤技術について世界に先駆け伝送実験に成功するなどデジタル無線通信分野の研究に取り組み電波利用の高度化に多大な貢献をした。

---

BST PAPER IEEE ICC2014-SYMPOSIA PAPER

---

平成 26 年 6 月 10 日  
村田 英一 准教授 (情報通信システム)  
「Capacity Oriented Resource Allocation Algorithm for Device-to-Device Communication in Mobile Cellular Networks」の論文に対して

---

言語処理学会 20 周年記念論文賞

---

平成 26 年 7 月 11 日  
河原 大輔 准教授 (知能情報学専攻)  
「格フレーム辞書の漸次的自動構築」の論文に対して

---

言語処理学会 20 周年記念論文賞

---

平成 26 年 7 月 11 日  
黒橋 禎夫 教授 (知能情報学専攻)  
「格フレーム辞書の漸次的自動構築」の論文に対して

---

MIRU Excellence Award

---

平成 26 年 7 月 31 日  
中澤 篤志 准教授 (知能情報学専攻)  
「Random resample consensus 法を用いた角膜表面反射とシーン画像の位置合わせ」に対して

---

MIRU Excellence Award

---

平成 26 年 7 月 31 日  
Christian Nitschke 助教 (知能情報学専攻)  
「Random resample consensus 法を用いた角膜表面反射とシーン画像の位置合わせ」に対して

---

MIRU Excellence Award

---

平成 26 年 7 月 31 日  
西田 豊明 教授 (知能情報学専攻)  
「Random resample consensus 法を用いた角膜表面反射とシーン画像の位置合わせ」に対して

---

日本オペレーションズ・リサーチ学会論文賞

---

平成 26 年 8 月 28 日  
増山 博之 准教授 (システム科学)  
「Tail Asymptotics for Cumulative Processes Sampled at Heavy-Tailed Random Times with Applications to Queueing Models in Markovian Environments」の論文に対して

---

日本ソフトウェア科学会高橋奨励賞

---

平成 26 年 9 月 9 日  
五十嵐 淳 教授 (通信情報システム)  
研究発表「多段階計測のための越段階埋込」に対して

---

2014 年度計測自動制御学会著述賞

---

平成 26 年 9 月 11 日  
丸田 一郎 助教 (システム科学)  
著書「カルマンフィルタの基礎」に対して

## 電子情報通信学会通信ソサイエティ活動功労賞

平成 26 年 9 月 24 日

**山本 高至** 准教授 (通信情報システム)  
通信ソサイエティにおける論文査読等、研究専門委員会運営等に関する献身的活動は学術交流活性化への寄与が多大であると認める。

論文賞 武田賞

平成 26 年 9 月 11 日

**太田 快人** 教授 (数理工学)  
「On Construction of an  $H_\infty$  Preview Output Feedback Law」の論文に対して

計測自動制御学会技術賞

平成 26 年 9 月 11 日

**加納 学** 教授 (システム科学)  
「Just-In-Time 型ソフトセンサーとモデル予測制御を統合した品質推定制御システムの開発と実用化」の論文に対して

ソフトウェア無線研究会技術特別賞

平成 26 年 5 月 22 日

**原田 博司** 教授 (通信情報システム)  
「SR2013-58 一時利用局を保護し二次利用局間の共存が可能な IEEE 802.11af/IEEE 802.22 ホワイトスペース通信ネットワーク」の技術展示に対して

Best Paper Award)

17th International Symposium on Wireless Personal Multimedia Communications (WPMC2014)

平成 26 年 9 月 9 日

**原田 博司** 教授 (通信情報システム)  
Field Experiment of Long-distance Broadband Communications in TV White Space Using IEEE 802.22 and IEEE 802.11af

第 12 回産学官連携功労者表彰 総務大臣賞

平成 26 年 9 月 12 日

**原田 博司** 教授 (通信情報システム)  
「世界標準スマートメータ用無線機の開発／標準化／実用化」の産学官連携活動に対して

IEEE Standard Association Working Group Chair Award

平成 26 年 5 月 31 日

**原田 博司** 教授 (通信情報システム)  
Part15.4 : Low-Rate Wireless Personal Area Networks (LR-WPANs)

## 2014 年度計測自動制御学会 論文賞

平成 26 年 9 月 11 日

**東 俊一** 准教授 (システム科学)  
「Performance Analysis of Random Dither Quantizers in Feedback Control Systems」の論文に対して

2014 年度計測自動制御学会 論文賞

平成 26 年 9 月 11 日

**杉江 俊治** 教授 (システム科学)  
「Performance Analysis of Random Dither Quantizers in Feedback Control Systems」の論文に対して

計測自動制御学会 SSI2014 優秀論文賞

平成 26 年 11 月 23 日

**藤原 幸一** 助教 (システム科学)  
心拍変動解析を用いたドライバの眠気検出の開発とそのスマートフォンアプリへの実装

計測自動制御学会

2014 年システム・情報部門 部門奨励賞

平成 26 年 11 月 23 日

**藤原 幸一** 助教 (システム科学)  
ウェアラブル心拍センサとスマートフォンを用いたてんかん発作兆候監視システムの開発

山内奨励賞

平成 27 年 1 月 10 日

**馬谷 誠二** 助教 (通信情報システム)  
「JVM バイトコードへの低水準操作を簡潔に記述可能なマクロシステム」の論文に対して

計測自動制御学会 制御部門大会賞

平成 27 年 3 月 6 日

**藤原 幸一** 助教 (システム科学)  
「統計的プロセス管理に基づいたてんかん発作兆候監視アルゴリズムの開発」の論文に対して

計測自動制御学会 制御部門大会賞

平成 27 年 3 月 6 日

**加納 学** 教授 (システム科学)  
「統計的プロセス管理に基づいたてんかん発作兆候監視アルゴリズムの開発」の論文に対して



# 情報学研究科教員配置一覧

2015. 4. 1.現在

専攻名	講座名	分野名	担当教員名				備考
			教授	准教授	講師	助教	
知能情報学	生体・認知情報学	生体情報処理	神谷 之康		細川 浩	前川 真吾	
		認知情報論			水原 啓暁		
		聴覚・音声情報処理 [連携ユニット]					
	知能情報ソフトウェア	ソフトウェア基礎論	鹿島 久嗣			中澤 巧爾 Ⓜ馬場 雪乃	
		知能情報基礎論	山本 章博	ⓂCUTURICAMETO, Marco		吉仲 亮	
	知能メディア	知能情報応用論	西田 豊明	中澤 篤志		大本 義正	
		言語メディア	黒橋 禎夫	河原 大輔			
		音声メディア			吉井 和佳	糸山 克寿	
	画像メディア	松山 隆司	川嶋 宏彰 Ⓜ梁 雪峰	延原 章平			
	生命情報学		熊田 孝恒	辻本 悟史		市瀬 夏洋	
兼任：知能情報学特別講義		○土佐 高子 [教授]				情報環境機構	
兼任：計算論的認知神経科学 兼任：音声情報処理特論				○中原 裕之 □加藤 宏明		理化学研究所 ATR	
メディア応用 ＜協力講座＞	映像メディア ネットワークメディア メディアアーカイブ	美濃 導彦 岡部 寿男 河原 達也	宮崎 修一 森 信介			秋田 祐哉 林田 守広 田村 武幸	
生命システム情報学 ＜協力講座＞	バイオ情報ネットワーク	阿久津達也				化学研究所	
社会情報学	社会情報モデル	分散情報システム	吉川 正俊	馬 強		清水 敏之	
		情報図書館学	田中 克己	ⓂJATOWT, Adam Wladyslaw		Ⓜ加藤 誠 山本 岳洋	
		情報社会論 (客)[連携ユニット]	宮脇 正晴 谷川 秀和	[山田 篤]			P, AP：京都高度技術研究所
	社会情報ネットワーク	広域情報ネットワーク	石田 亨	松原 繁夫 ⓂKINNY, David Nicholas		Ⓜ林 冬恵	
		情報セキュリティ (客)[連携ユニット]	[岡本龍明]	[阿部正幸]			P：NTT AP：NTT
		市場・組織情報論 [連携ユニット]	[横澤 誠]	[木下貴史]			P：野村総研 AP：野村総研
	生物圏情報学	生物資源情報学 生物環境情報学	守屋 和幸 大手 信人	三田村 啓理 小山 里奈		Christian E.Vincenot	
	兼任：サービスモデリング論 兼任：サービスモデリング論他 兼任：サービスモデリング論他		□原 良憲 松井 啓之	前川 佳一 [特定准教授]			経営管理大学院 経営管理大学院 経営管理大学院
兼任：社会情報学特殊研究1他 兼任：社会情報学特殊研究1他		田島 敬史 喜多 一				国際高等教育院 国際高等教育院	
社会情報学	兼任：フィールド分析法 兼任：医療情報学 兼任：情報システム設計論I及び演習 兼任：医療情報学 兼任：医療情報学 兼任：暗号と情報社会 兼任：暗号と情報社会 兼任：社会情報学特殊研究1.2 兼任：社会情報学特殊研究1.2 兼任：社会情報モデル特別セミナー 兼任：社会情報モデル特別セミナー 兼任：情報と知財 兼任：情報と知財			□加藤 源太	□山内 裕 □長瀬 啓介 ○谷 幹也 □竹村 匡正 ○上原 哲太郎 ○谷 幹也 宮脇 正晴 谷川 秀和 宮脇 正晴 谷川 秀和 □宮脇 正晴 □谷川 秀和		経営管理大学院 医学部附属病院医療情報センター 金沢大学附属病院 NEC 兵庫県立大学大学院 立命館大学 NEC 立命館大学 IRD 国際特許事務所 立命館大学 IRD 国際特許事務所 立命館大学 IRD 国際特許事務所
	地域・防災情報システム学 ＜協力講座＞	総合防災システム 巨大災害情報システム 社会情報心理学	多々納裕一 矢守 克也 林 春男	畑山 満則		鈴木 進吾	防災研究所 防災研附属巨大災害研究センター 防災研附属巨大災害研究センター
	医療情報学＜協力講座＞		黒田 知宏	田村 寛	岡本 和也		医学部附属病院医療情報部
	情報フラーエンシー教育＜協力講座＞		喜多 一	上田 浩		森 幹彦	学術情報メディアセンター



専攻名	講座名	分野名	担当教員名				備考
			教授	准教授	講師	助教	
複雑系科学	応用解析学	逆問題解析	磯 祐介		久保 雅義 Ⓞ陳 逸昆		
		非線型解析	木上 淳		若野 功	藤原 宏志	
	複雑系力学	非線形力学	船越 満明			金子 豊	
		複雑系数理 複雑系解析 (客)	青柳豊誌生		宮崎 修次	筒 広樹	
	応用数理学	計算力学	西村 直志		吉川 仁	原田 健自	
		知能化システム			永原 正章	新納 和樹	
		兼担：複雑系科学特別セミナー 兼担：複雑系科学特別セミナー 兼担：複雑系科学特別セミナー 兼担：複雑系科学特別セミナー 兼任：複雑系力学特論 I I 兼任：応用解析学特論 I I 兼任：応用解析学特論 I 兼任：応用解析学特別セミナー A, B	北村 隆行 樫木 哲夫 青木 一生 坂上 貴之		□寺前順之介 友枝 謙二 梶野 直孝 日野 正則	工学研究科 工学研究科 工学研究科 理学研究科 大阪大学 大阪工業大学 神戸大学 大阪大学	
数理工学	応用数学	数理解析	中村 佳正	辻本 論		上岡 修平	
		離散数理	永持 仁			Shurbevski Aleksandar	
	システム数理	最適化数理	山下 信雄			福田 秀美	
		制御システム論 応用数理モデル [連携ユニット]	太田 快人 [山本 彰]	加嶋 健司 [福本 恭]			P: (株) 日立製作所システム開発研究所 A P: (株) 日立製作所システム開発研究所
	数理物理学	物理統計学	梅野 健	五十嵐顕人		佐藤 彰洋	
		力学系理論	矢ヶ崎 一幸			山口 義幸	
		数理ファイナンス<協力講座> 兼担：ビッグデータの計算科学 兼任：応用数理工学特論 A 兼任：金融工学 兼任：金融工学	□小山田 耕二		○澤井 秀文 ○瀬古 進 ○野崎 真利	国際高等教育院 (独) 情報通信研究機構 (株) 三菱 UFJ トラスト投資工学研究所 (株) 三菱 UFJ トラスト投資工学研究所	
システム科学	人間機械共生系	機械システム制御	杉江 俊治	東 俊一			
		ヒューマンシステム論	加納 学	西原 修		藤原 幸一	
		共生システム論	大塚 敏之			平岡 敏洋	
	システム構成論	適応システム論	田中 利幸			大関 真之	
		数理システム論		林 和則		金子めぐみ	
	システム情報論	情報システム	高橋 豊	増山 博之			
		論理生命学	石井 信		大羽 成征	前田 新一	
		医用工学	松田 哲也	中尾 恵		嶋吉 隆夫 Ⓞ今井 宏彦 Ⓞ山本 詩子	
			応用情報学<協力講座>	中島 浩		平石 拓	学術情報メディアセンター 学際融合教育研究推進センター デザイン学ユニット
			兼担：数理とデザイン 兼任：医用システム論 兼任：計算神経科学、計算知能システム、システム科学特殊研究 1・2 兼任：計算神経科学、計算知能システム、システム科学特殊研究 1・2 兼任：計算神経科学、計算知能システム、システム科学特殊研究 1・2 兼任：情報システム特論 兼任：計算知能システム、システム科学特殊研究 1・2	□川上 浩司 [特定教授]		川人 光男 銅谷 賢治 深井 朋樹 □笠原 正治 上田 修功	ATR OIST 理化学研究所 奈良先端科学技術大学院 NTT 先端総合研究所

専攻名	講座名	分野名	担当教員名				備考
			教授	准教授	講師	助教	
通信情報システム	コンピュータ工学	論理回路	岩間 一雄			玉置 卓	
		計算機アーキテクチャ	高木 直史	高木 一義		高瀬 英希	
		計算機ソフトウェア	五十嵐 淳	末永 幸平		馬谷 誠二	
	通信システム工学	デジタル通信	原田 博司	村田 英一		水谷 圭一	
		伝送メディア	守倉 正博	山本 高至		西尾 理志	
	集積システム工学	知的通信網		新熊 亮一			
		情報回路方式	佐藤 高史			廣本 正之	
		大規模集積回路	小野寺秀俊	石原 亨		土谷 亮	
	地球電波工学 〈協力講座〉	超高速信号処理	佐藤 亨	乗松 誠司			
		リモートセンシング工学	山本 衛	橋口 浩之			生存圏研究所
	地球大気計測	津田 敏隆			矢吹 正教 古本 淳一	生存圏研究所	
	兼担：情報通信技術のデザイン		○荒牧 英治 [特定准教授]			学際融合教育研究推進センター デザイン学ユニット	
	兼担：情報通信技術のデザイン		○村上 陽平 [特定准教授]			学際融合教育研究推進センター デザイン学ユニット	
共通	兼担：イノベーションマネジメント基礎		○前川 佳一			経営管理大学院	
	兼担：計算科学入門他		㊦矢作日出樹			学術情報メディアセンター	
	兼任：情報学展望 4, 5					東京大学	
	兼任：応用集積システム					立命館大学	
兼担：問題発見型／解決型学習 (FBL／PBL) 1・2			荒牧 英治			学際融合教育研究推進センター	
兼担：問題発見型／解決型学習 (FBL／PBL) 1・2			十河 卓司 [特定准教授]			学際融合教育研究推進センター デザイン学ユニット	
兼担：問題発見型／解決型学習 (FBL／PBL) 1・2					北 雄介 [特定助教]	学際融合教育研究推進センター デザイン学ユニット	
兼担：デザイン構成論	中小路 久美代 [特定教授]					学際融合教育研究推進センター デザイン学ユニット	
	高度情報教育基盤ユニット	田中 克己	㊦大島 裕明 ㊦浅野 泰仁 ㊦木村 欣司 ㊦山肩 洋子		㊦加藤 誠 ㊦關戸啓人	国際高等教育院	
	〈知能〉エネルギーの情報化共同研究講座		㊦加藤 丈和		㊦JAVAI SAHER ㊦VERSCHAE TANNENBAUM, Rodrigo Andres		
	〈社会〉EHR共同研究講座		㊦糸 直人				

(参考)

- 兼担・兼任について、無印：通年、○印：前期、□印：後期を示す。
- 連携ユニット：予算措置されているもの 社会情報学専攻の2分野（情報社会論、情報セキュリティ）  
研究科内措置によるもの 知能情報学専攻（聴覚・音声情報処理）、社会情報学専攻（市場・組織情報論）  
数理工学専攻（応用数理モデル）
- ㊦は特定教員を示す。

## 日 誌 (平成26年4月1日～平成27年3月31日)

## 平成26年

4月4日	専攻長会議
4月7日	大学院入学式
4月11日	教授会
5月2日	専攻長会議
5月9日	研究科会議・教授会
6月6日	専攻長会議
6月13日	教授会
7月2日	専攻長会議
7月11日	研究科会議・教授会
7月18日	臨時専攻長会議
8月18日	臨時専攻長会議
9月5日	専攻長会議
9月12日	研究科会議・教授会
10月3日	専攻長会議
10月10日	教授会
11月7日	専攻長会議
11月14日	研究科会議・教授会
12月5日	専攻長会議
12月12日	教授会
12月19日	臨時専攻長会議

## 平成27年

1月9日	専攻長会議
1月16日	研究科会議・教授会
2月6日	専攻長会議
2月13日	教授会
2月20日	臨時専攻長会議
3月6日	専攻長会議
3月13日	研究科会議・教授会
3月23日	大学院学位授与式

## 情報学研究科評価・広報委員会 広報ワーキンググループ

評価・広報委員 広報担当	青柳富誌生	黒橋 禎夫		
ワーキンググループ メンバー	細川 浩	小山 里奈	永原 正章	
	Aleksandar Shurbevski	中尾 恵	山本 高至	
事務担当	情報学研究科・総務掛			